



第十一次日華(台)親善友好慰靈訪問の旅

感想文集

—— 祭文・結団の誓い付 ——

添付資料

軍人勅諭

教育勅語

宣戦の詔書

終戦の詔書

戦陣訓

平成二十二年一月二十三日(土)

日華(台)親善友好慰靈訪問団

◎ 団員の皆様からお寄せいただいた感想文を
編集いたしました。

◎ 事務局で責任校正しましたが、可能な限り
原文に忠実に表現しました。

◎ 尚、配列は五十音順としました。

◎ 巻末に「祭文」と「結団の誓い」を付記
しました。

◎ 添付資料の「軍人勅諭」・「教育勅語」・

「宣戦の詔書」・「終戦の詔書」は

今次訪問団の顧問である

谷尾侃（ただし）様から寄贈された

『詔勅集』（財団法人偕行社版）に、また

「戦陣訓」は齊藤瀏編纂による

『戦陣訓讀本』（三省堂版）に

準拠させていただきました。

ご協力有難うございました。

二度目の感謝と感激の旅

岩本 宣善

訪問先でのそれぞれの所感は他の方の筆に譲って、参加されなかった方の為に私は総括的に書いて見たい。最後の晩、台北の広東料理のレストラン『華漾大飯店』でご指名により小生が彼の挨拶をした内容に若干肉を付けたものである。参加された方は又かとお思いでしょうがご容赦を願いたい。

去年初めて参加した初年兵は今年早くも第五班の班長を仰せつかった。『継続は力なり』とは言うが毎年同じ所、同じ相手を訪ねてマンネリズムにならないか？ 順子奥様のお誕生日ケーキカットまで同じなのだ。小菅団長は毎年新しい感動があると言われたが終わって見れば確かにそうであった。

(一) ガランピー岬から巴士海峡へ献花。

潮音寺へは初訪問。

(二) 塩水小学校での蛇踊り・太鼓の歓迎は去年はなかった。

(三) 去年はシングルルーム、今年は大牟田の篠原先生と四泊五日生活を共にした。心の友を作るに旅を共にするに勝るものはない。『校長先生』は海交会の宴席で『戦友』を歌って喝采を得られた。数学の先生である。

(四) この度は従軍記者サンケイ新聞の力武記者が同行取材された。記事が楽しみである。

(五) 初めて日本人以外の人が参加した。スリランカのサニーくんの存在感は何処へ行っても強烈だった。

最大の収穫はガイドの簡元少佐との旧交を温めたことである。初めての人は彼の独特の口ぶりに驚く。しかし終わって見るとずしんと心に残るものがあるのだ。

次に実に多彩なキャラを持ち、しかしバランス感覚に秀でた方々から学ぶ点が多かった。第三には前回同様この旅はマツカーサーに抜かれた金玉を取戻し日本人の本領である『教育勅語』と『軍人勅諭』小生は加えて『海兵五省』だが、それを再認識する旅である。

よくガイドが言う『魔の三日目』を乗り切り最後の日には最重要任務である外交部訪問も無事に果たした。正に国家に代わって中華民国政府に正対するのである。

三十名が一糸乱れず、一件の事故もなく粛々と行動した。ひとえに小菅団長のリーダーシップとスタッフの各位のお蔭であった。

お約束通りパスポートを十年ものに更新した。微力ながら関東は相模の国から、小菅亥三郎先生を支える一石になる所存である。

尚、小生の海外の旅のモットーは『万事八十点主義』である。

「台湾奥の細道」

近頃HAIKUなどと海の向こうでも俳句熱が高まっていますが海外での旅吟は季語に苦労します。金子兜太は超季と称して無季でも一向に構わないと言います。また吟行の句はとかくどきつとするような発見が無いと只の報告俳句とけなされますし、所詮一緒に行った人になしか通じない『仲間俳句』であります。

このことを百も承知で拙句を並べます。

墾丁ガランピー岬

群青や 『金剛』 ここに眠れるか

冬潮や 『阿波丸』 被雷位置知ラセ

光る海 ああ堂々の 輸送船

急流に 乗りて消えゆく 献花かな

台南

飛虎廟の インディアンサマー 人優し

八田像 緑の靈気に 囲まれて

風渡る 嘉南穀倉 稲の波

台中宝覺寺慰靈祭

宝覺寺 兵老いゆくを 如何にせん

「海ゆかば」 「靈安故郷」 冬日燦

烏来高砂族の村

巫熱帯と 言えども光る 芒原

冬日燦 勇士の像の 囲ひ消ゆ

台湾有情

大橋 昭仁

今回の本訪問団の台湾旅行で記しておきたいことを以下に挙げる。

一、まず、外国人（スリランカ人）であるW・サニー氏に参加して頂いたことである。私と彼とは仕事上のお付き合いの関係である。しかし一人で食事をするのは寂しいという彼の性格もしくは彼なりの食習慣から、彼に誘われて一緒に食事をするのがしばしばだった。その席上、本慰霊訪問団と現地の方々（特に日本語世代の方々）との温かい交流について私が触れると、しばしば怪訝な表情をするのでその理由を尋ねてみると、「台湾人が日本人に好感を持っているのが信じられない」とのこと。さらにその理由を尋ねると、彼の母国スリランカと植民地宗主国だったイギリスとの関係とオーストラップして理解しておられるようであった。彼によると、イギリスは、彼の国に随分ひどいことをしているのである。

彼は一見穏やかな人柄であるが芯には激しいものも持っており、それは彼がイギリスを語る時にしばしば表情に出た。

そこで「イギリスと日本は違いますよ！」と私が言い放つと、「そんなはずはない！」と睨みつけてくる。「そんなに信じないのなら一度だけでもよいから一緒に我々の旅行に参加すればいいでしょう！」と切り返すと、「じゃあ参加しましょう！！！」ということ、参加人員三十二名分の一名になった次第である。まさに売り言葉に買い言葉である。

彼は初日と二日目の朝こそ「こんな朝の早い旅行は初めてだ」「スリランカ人は、朝紅茶を飲まない」と頭も体もおかしくなる。だから紅茶を飲む時間も無い様な旅行は、もうこれが最後。（この訪問団に）参加するのは一回だけ！」と激しくも情けない愚痴をこぼしていたが、日台両方のみなさんが大切にして下さるのがよほど気に入ったのか、二日目の午後以降は、たいそう機嫌よく、朝グズグズする以外は申し分のない優良メンバーであった。その他の道中の彼への人物評価・所作言動の印象については、「一緒に皆様方の受けた彼への印象記・印象談にお任せしたい。」

同行した産経新聞の記者の力武さんが、サニー氏の存在を上手に使って随行記事を作成してくれた（平成二十二年十二月一日同紙朝刊）。烏山頭ダム（烏山頭水庫）を背景に、ポエム的な随行記を書いてくれた。爽やかな印象を与える、若さの出たよい記事だと思う。

ただ、私が本当に記事にして欲しかったのは、台南市郊外の奇美博物館での同博物館

の重鎮、石栄堯氏との対面のシーンである。それは、団長が外国人であるサニー氏の参加の動機と彼が持っている疑問を石氏に紹介したところ、石氏が、問髪をいれず「もし日本に統治されていなかったら、台湾は今の海南島よりも貧しい島だっただろう。台湾人は日本に感謝している」旨を説明し、さらに現在も朝はお味噌汁を食卓に欠かした事がない、云々といった旨の親日的なエピソードを披露された場面である。あの光景はまさに正面からサニー氏の疑問に答えたものであり、かつ私どもの旅行目的から見ると値千金の価値のあるものだったからである。

もつとも、新聞記事といえども、読み物としての面白さは必要であり、その辺は十分検討の上の記事化だろうから、あの記事の結果には満足している。

二、次に印象に残ったのは、最終日の烏来の「高砂義勇隊戦没英霊記念碑」を訪れた時の事である。実は同記念碑は最近まで石碑の表面をすっぽり竹で覆われていたそうであるが、私ども訪問時はそれが取り払われていた。そのいきさつを語って下さった現地の同記念碑の保護管理団体「高砂義勇隊記念協会」の代表者（理事長代理）周萬吉さんのお顔の表情が何とも言えず実に誠実そのものであった。地元で慰霊碑の存続に反対し、前述の慰霊碑を竹で覆う人達がいたのだが、それには、色々と誤解があった様だ。その一つに、日の丸の掲揚の問題がある。日本国旗としてではなく、台湾軍の旗として、掲げているのだ、ということを知ってもらうのに随分苦労されたようである。「日本国旗を投げ捨てればいくらでも融通はきく。しかしそれでは多額の寄付をして下さった日本の皆様方に申し訳ない云々」と、そうおっしゃる一人の小柄なご老人のお顔には誠実さが溢れていた。私は絶えて久しくそのようなお顔を拝見したことがないので、思わず目頭が熱くなった。

三、三番目は林阿勇氏のことである。十一月二十四日の台日海交会のパーティーの席上、同氏が私にA4の紙を渡しながらか話しかけてこられた。その紙には五十二名の台湾人の方々のお名前や住所、職場名等が書かれてあった。それは、私がかつてお届けした「長寿十訓」という訓辞集をわざわざ五十二名分コピーして配って下さったその相手方の一覧表だったのである。私は本当に驚くと同時に感激した。おそらく林さんは長寿十訓をおおいに気に入られ、私への感謝の気持ちとして沢山の友人・知人へ伝えて下さったのであろう。そして、それらの人々の載った手書きの名簿を作成し私に届けて下さったのであろう。「これだけの仲間があなたに感謝しています」という意味であるうか。まさに手作りの感謝の表現方法である。ありがたい限りである。かつて、飛虎將軍廟の責任者の呉さんが、私どもへの感謝の気持ちとして「同期の桜」の歌詞をその時の団員の人数分（約二十名分）を手書きして一人一人に配って下さった事だった。その思い出と重なって感無量の一時であった。

なお、林阿勇さんは、私どもが帰国する際は台北空港までお見送りに来て下さった。

日本語世代の、そして古き良き日本人の律儀さを体現しておられる台湾人のお一人である。

四、他に、旅程中のかなりの部分を同行して下さった林溪和さんいつものことながら印象深い方である。前述の産経新聞欄にお写真とお名前前の掲載された方である。

また、わたしの「兄貴分」台中市の蔡純雄氏も、昨年より元気になっていてくれた。良かったと思っている。私が傘寿のお祝いに送ったハンテンを着て見せて欲しかったが残念ながら日本語のよく話せない同伴者がおられたので、そちらの通訳に追われてできなかったようだ。私も残念だったが、兄貴も残念そうだった。

その同伴者は蔡さんがボランティアで経営している日本語学習塾の生徒さんで、日本語の会話力はいまひとつだが、それを学びたいという強い意思を感じた。日本語を学んでくださることはありがたく、とても嬉しい。

五、二十四日の台湾台日海交会、二十五日の台湾中日海交協会主催の二つのパーティーは例年の恒例行事であったが共に楽しかった。ただ、出席者の人数が年々減っている。日本語世代の皆さん方の高齢化は避けられない事である。しかし、この立派な方々の存在が忘れ去られてよいだろうか。今回痛感したのは若い世代同士の交流も必要だということだ。日本の若い人たちに現地の言葉を覚えてもらい、現地の若者達とおつきあいをしたい。大いに語り合って欲しいその内容は「あなた方のおじいさん、おばあさんの世代はこんなにすばらしい方々だったんだよ！」ということである。日本の為によく働き、よく戦い、また日本の心を胸に秘めて戦後台湾の為に尽くした、この世代の方々のことは末永く顕彰して頂きたい。その為には、我々日本人がそのことを台湾の次の世代の皆さんによく語り伝える義務がある。その役割の一翼を荷うべきは我々団塊の世代であるが、私どもより残りの人生に時間的余裕のある若い世代の皆さん方にも努めて欲しい、とそう願っている。

六、その他、潮音寺での前原清美氏のお父様へのご供養・慰霊祭など、語弊があるがさわやかな涙を流させて頂ける、いつものことながら感慨深い事の多い旅行だった。

慰霊を回復して人は国民になる

梶栗 勝敏

平成二十一年十一月二十二日から二十六日まで、第十一次日華（台）親善友好慰霊訪問団に参加させて戴いた。宝覚寺での慰霊祭をはじめ、六回の慰霊式、二回の献花式が行われ、「慰霊」に始まって「慰霊」に終わる旅であった。大東亜戦争で散華された元日本軍人軍属の台湾人英霊への感謝の念を捧げ尽くす、まさに「鎮魂」の台湾南北縦断の巡拝であった。

この手記では、訪問団に参加しての所感を述べ、最後に現地を訪れての所感を記させて戴きたい。

■訪問団に参加しての所感

①許國雄先生も訪問団の努力にお喜び

十年前の平成十一年、小菅亥三郎・九州不動産専門学院理事長（以下、小菅团长）より台湾訪問に際しての良書を請われたとき、許國雄先生監修の『台湾と日本・交流秘話』を推薦した。我が国が台湾の近代化に心血を注いだ日本民族の業績や文化遺産、また台湾の歴史や自然などが広く紹介され、「世界一の親日国家」と言われる由縁が首肯できる書である。しかし今回の旅を経験して、訪問団が訪れた慰霊地については、指南書とも言うべき『台湾と日本・交流秘話』にも掲載されていない場所や逸話が複数ある。日本と台湾の慰霊にまつわる史跡や歴史の新たな発見と訪問は、第一次より第三次まで学校挙げて毎年訪問団を受け入れて下さった、今は亡き東方工商専科学校学長の許國雄先生も、天界より目を細めて喜んでおられることと思われる。そして先生がご存命で、『台湾と日本・交流秘話』の改訂版を出されるときは、おそらく小菅团长にもご協力のお声をかけられたことであろうと思われた次第である。

②祭文は英霊への最大の感謝であり偉業の顕彰

四泊五日の訪台の中で最も大切なものは、毎年十一月二十五日に実施されている宝覚寺での「台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」への参列である。大東亜戦争当時、数百倍という狭き門を勝ち抜いて志願兵になっていった強者たちの集う慰霊祭である。だが、大東亜戦争の終結より六十有余年、当時の戦争経験者の多くが鬼籍に入られており、戦争経験者の参列は少なくなっている。

嘗て高砂族の古老は、「我々は台湾に来たオランダにも鄭成功にも、そして清国に対しても屈従しなかった。しかし、日本だけは別だった。それは大東亜戦争の魅力に勝てなかったからだ」と語ったという。また戦後、留学して半世紀に亙り日本文学を研

究し、昨年文化勲章を受章したドナルド・キーン博士は、戦時中ハワイで情報士官として海軍に勤務。戦場になったガダルカナル島から届く日米双方の兵士の遺書やメモを読んで、「今次の戦争の大義は日本にある。日本が勝つべきだ」と思ったという。そして、一身を捧げてまでも国の大義に尽くす若者を生み出した日本の国に魅せられ、戦後、日本の研究を始められた。あの当時、台湾や韓国、そして被植民地のアジアの国々は、窮地に追い込まれた日本が自存自衛をかけて立ち上がり、数百年のアジア支配の桎梏の打破に挑んだことに心から感激し、熱狂し、協力したのである。

さて宝覺寺の慰霊祭において、大東亜戦争の意義、また勇敢に戦った元日本軍人軍属であった台湾人の偉功を語るものは、小菅団長の祭文一つであった。主催者である台湾人体験者（元日本人軍人軍属）からそのことが語られていなかっただけに、英霊の志と戦いの歴史的意義が語られていたその祭文は重い。さぞ英霊及び戦没者の方々も小菅団長の祭文には心から嘉賞しておられることと拝察した次第である。

③小菅団長の努力と人柄への厚い信頼の賜物

一言で言えば、充実した台湾訪問であった。現地の方々との交流や歓迎の場を除いては、殆ど慰霊のみの訪問である。普通の旅行社に頼めば二、三個分の旅行はあると思われる重厚さであった。しかも、今年は従来よりも一日長い四泊五日の企画にも関わらず、昨年、訪問した富安宮や芝山巖はコースに入っていない。これまで訪問団が如何に多くの慰霊地を訪ねているかの証である。

しかし、こうした訪問団も偏に小菅団長の努力と、その努力や人柄に対する台湾の人たちの厚い信頼の賜物である。私たちの訪問団は行政等の公式訪問でもなければ、多くの議員を擁しているわけでもなく、一市井の人々からなる民間の団体である。にもかかわらず、三日目（十一月二十四日）の台南県での昼食会には蘇煥智県知事が参加された。また最終日（十一月二十六日）の外交部での手厚い歓迎、打ち解けたご挨拶、日本と台湾との各分野での一層の交流促進への熱意は、訪問団に対する信頼である。亡くなった台湾人（元日本人軍人軍属）に対する不変且つ誠実な慰霊訪問は、台湾の人々に感動と尊敬の念を与えているように思われた。

第一次より小菅団長を中心とする訪問団の企画は、常に手作りである。そのために派生する複数のハプニングや逸話は、主宰者の苦勞に同情しながら仄聞していた。しかし今回の第十一次の場合は殆どハプニングなき、充実した慰霊訪問であった。これも偏に十年に亙る蓄積と毎次の考察の積み重ねの成果である。それでも、三日目に黄昆虎・台湾友之會總會長の由緒ある私邸への熱心なお招きがあり、ご厚意を受け入れ、その日の行程が一時間以上遅れたことがあった。しかしこれはもうハプニングというものではあるまい。台湾の関係者と小菅団長の間に結ばれた堅く太い絆の故で、もう不可抗力に近い。

④名伯楽の簡さんを載いて千里を走る訪問団

料簡ながら、外国訪問で重要なことは現地を知悉している案内者の存在だと思っている。私事ながら過去三回の訪問の中で、最初の韓国においては、当時、最高位の大統領より上席に座られる、朝鮮戦争の国民的英雄の白善燁大将にご案内戴いた。二番目の、ロシアに戦後六十余年占拠され続けている北方領土においては、齒舞諸島にある志発島出身で北方領土返還要求運動連絡協議会の事務局長を長年務められている児玉泰子女史だった。三番目のサイパンでは、二十年以上に亘って戦跡のガイドを務められ、現地の人と結婚された元日本人の女性の方や北マリアナ日本人会会長がおられた。こうした方々との対話や案内は、通常の旅行では窺い知ることのできない内情や様々な話題に及び、訪問を一層意義深いものにした。

今回の訪問団には、簡添宗さんがおられた。戦前は日本人であり、戦後は中華人民共和国との戦いにも参戦された空軍の強者である。また日本の統治時代の体験者であり、訪問団の趣旨に共鳴され、日本人の「義理・人情」を理解される簡さんは、訪問団の成功を支えておられる大きな柱である。中国の故事に「世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り」とある。伯楽がいて、後に千里も走る名馬が見出されるとの謂いである。訪問団も簡さんという名伯楽を得て、名馬としての潜在力や輝きを發揮しているのではないだろうか。無論、大東亜戦争の経験者をはじめ、心が通う大勢の現地の人たちの存在を忘れることはできない。加えて、日本の統治時代の真実を書籍に著され、今回半分の行程を同行された林溪和さんの功績、人柄も忘れ難い。そうした様々な要素が結集して、感動と余韻の深い訪問団が誕生、まさに日台魂交流の訪問団と感じた次第である。

■現地を訪問しての所感

今回の訪問先の中で特に印象に残ったのは、次の四箇所である。一つは台湾最南端の鷲鑾鼻岬と潮音寺、二つ目は八田與一氏の一大事業の八田ダム、三つ目は台湾の靖國神社といわれる南天山濟化宮、四つ目は高砂義勇隊英魂碑が建立されている烏来である。常々、李登輝元総統が日本統治時代の事績の中でも高く評価されている、嘉南平野を一大穀倉地帯に変えた八田與一氏の大事業や、先祖からの独自の文化と強靱な心身を持ちながら日本精神に生き、大東亜戦争では日本人以上の戦いをした高砂族の故郷・烏来を訪ねたとき、教育の崇高さと偉大さを改めて実感させられた。また濟化宮が創建されたのは昭和三十八年であり、厳しい戒厳令下の時代である。その時代に大東亜戦争で散華された方々を祀ることは反政府行為である。しかし当時の戦友や関係者は、靖國神社から霊璽簿の複製を戴き、全員の霊牌を製作して英霊を祀ったのである。ここまで戦友を大切にする彼らの生き方、そして斯くまで人生に感化を与えた

日本の教育に心から感銘を覚えた次第である。

果たして、国民として生きる幸福とは何か。祖国の誇りある歴史を継承し、高邁な志に生きた先人の方々に連なつて生きる喜びではないだろうか。戒厳令下の生活を三十余年も耐え忍び、戦前の日本統治時代に受けた教育を誇りに思い、大東亜戦争を勇ましく戦つた思いを今なお尽きることなく、訪問団の私たちに語りかけてこられる。そこには、国家のために誇り高く生きた日本国民の姿があつた。

思い起こすのは、この慰霊訪問団の名付け親で、私たち日本会議の国民運動をご指導下さつていた日高清先生（元福岡県郷友連盟副会長）のことである。日高先生は戦前、蒙古の軍官学校で教官をされていた。そのときの教え子が四十年を経て、娘・包智光（ポウチコウ）氏の日本留学を依頼してきた。包氏も、教え子であつた父親から「日本は素晴らしい国だ」と幼少から聞かされ、日本留学を強く希望したのである。やがて日高先生は包氏の身元保証人になり、留学の間お世話をされた。日高先生が留学中の包氏に施された教育は、各地の慰霊祭に連れて行かれることであつた。慰霊祭には先の戦争の戦友や遺族が多数集られており、当時の日本人の生き方や精神、歴史がそのまま語られている。日本精神の教育を受け、歴史の証人であり体験者である戦友や遺族に会わせて、日本そのものを肌で感じさせておられたのではないかと思う。顧みれば今回の私たち訪問団も同様の経験であつた。

嘗て私たちが学生の頃、「祖国日本を回復したとき人は人生を取り戻す」と言われた。戦後教育とは国家を喪失した教育に他ならない。しかし今回の訪問を経験して、「慰霊を回復して人は国民になる」ことを痛感した。慰霊が如何に尊いものであるか、また慰霊を大切にできるほど日本人の歴史を回復しなければならぬことを感じさせられた。まことに貴重な旅であつた。

異例づくめの感動

金澤 明夫

私は今回で4回目の参加でしたが、何回も参加すると最初の強烈な印象は薄れ、概ねお決まりのコースを巡り、各々の現地での様子も見当がつかず。

そう思うと、正直言つて無理に参加しなくてもいいかという気持ちにもなりますが、年に一度だけの慰霊と待っていてくださる方がおられるからという思い、そして、NHKの「アジアの一等国」にみられる反日的、反台的報道に対するお気持ちを知りたいたいの思いもあり、今回も参加させていただくことになりました。

しかし、今回は、思いもよらない異例の出来事が数々あり、やはり行って良かったというのが私の結論です。その出来事を列挙すると、

- 1、産経新聞の記者の同行
- 2、外国人の初参加
- 3、保安堂の堂々たる改築
- 4、南十字星の発見
- 5、潮音寺で日本人ご遺族との慰霊
- 6、台南県長(県知事)との昼食会
- 7、元李登輝友の会台湾会長宅(旧家)へのご招待
- 8、塩水小学校の熱烈歓迎
- 9、済化宮の電光掲示板と祓詞奏上
- 10、高砂義勇隊記念碑の整備と碑文

これらの出来事の一つ一つについて感想を述べるとすれば、字数が膨大になりますので、残念ながらここでは割愛します。

ただ、大変嬉しく思ったことは、回を重ねて参加する度に、私のことをよく覚えていって下さって、「金澤さん、今年もよく来て下さいましたね。」とにこやかに声をかけていただいたことであり、NHKに対する抗議の署名を数多く集められたという事実を知ったことです。

これらのことは、しっかりと「日台の命の絆」で結ばれていることを意味します。

台湾で出会った方々の日本及び日本人に寄せられる思いは半端ではありません。それ故に、世界で最も親切的な国、台湾を決して裏切ってはならないと、訪問するたびに実感致します。

第十一次日台親善友好慰霊訪問団に参加して

古賀 誠

訪問団参加は二回目なので、ここでは初めて訪問した二箇所、台湾南端の鵝鑾鼻と台北郊外の高砂義勇隊戦没英霊記念碑を中心に記したい。台湾南端の岬鵝鑾鼻（ガランピー）の灯台下からはフィリピンとの間のバシー海峡が見下ろせた。この周辺の海で大東亜戦争末期に多くの人命が失われた。以前の戦争では軍隊と軍隊との戦いだったのだが、大東亜戦争では軍艦のみではなく多くの輸送船・貨客船までが攻撃の対象とされた。この事は日本本土への連合国の無差別都市爆撃や原子爆弾投下とも軌を一にする。制空権・制海権を連合国側に握られた後、アメリカ潜水艦の攻撃を受けて付近で沈められた船は五千トン以上の大型船舶だけで二百隻以上、海底に沈んだ軍人、邦人は二十五万人以上とされる。当時付近の海岸には多くの遺体が漂着し、地元の人々が茶毘に付し埋葬した。

昭和十九年八月に撃沈された玉津丸から十二日間漂流し、九死に一生を得た中嶋秀次氏（静岡市在住）の私財を中心に作られた基金を使って、千九百八十一年に近隣の猫鼻頭（マオピートウ）の海浜近くに土地と寺が寄進され、仏教寺院の潮音寺が建てられた。そして毎年慰霊祭が行われ、毎年二百〜三百人の日本人遺族が慰霊に訪れている。私たちの訪問団にも遺族の方が参加しておられて、一緒に潮音寺で慰霊祭を行い、また海へ向かって花束を投げて霊を弔った。

この潮音寺の管理は台湾人が全くの好意から自費でなさっているという。だが終戦から六十四年が経過して、潮音寺の建っている土地の登記が不十分だった為に、地権者の代替わりに伴って土地が第三者に転売され、潮音寺の存続は予断を許さない。

万一の場合取り壊されて民宿に建て直されるかもしれないという。

次に台北郊外烏来（ウーライ）の高砂義勇隊戦没記念碑について書きたい。高砂族とは台湾の高地原住民（生蕃）の日本的呼称である。昭和十七年頃になって台湾でも兵隊募集が始まり、三百〜六百倍の志願者があったという。高砂特別志願兵は七度にわたって編成され、合計六千〜八千名が参加した。高砂義勇軍は大東亜戦争末期にフィリピンなど南方の戦場に投入され、主に軍属として戦闘にも参加し、特に南方戦線では勇敢で高い戦闘能力を發揮して、日本陸軍を助けた。戦死者は約三千人にのぼった。

千九百九十二年原住民の子孫周麗梅（看護婦さん）によって高砂義勇軍戦没英霊記念碑が建てられ、維持管理されていた。しかし敷地を提供していた観光会社がS

A R S 流行時の観光客減少で倒産した。このニュースは産経新聞に報じられ、日本で募金された三千二百万円余を使って慰霊碑は二千六年二月県有地に移された。しかし、地元の中国時報が慰霊碑の碑文が日本を賛美していると報道したことから、碑文は竹柵で覆い隠されてきた。

今回の訪問ではやつと竹柵が外されており、慰霊碑全体を確認できた。特に慰霊碑の基部に東京の方向に向けて設置されている元台湾軍司令官本間雅春中将(B級戦犯としてマニラで処刑)の歌碑「かくありて許さるべきや密林のあなたへ消えにし戦友(とも)を思えば」にも対面が叶った。なお、周辺は県立公園としての整備工事が進行中だった。

総統が国民党の馬英九に代わった後、本年六月には尖閣諸島周辺で日本の巡視船と接触して台湾漁船が沈没する事件があり、台湾は「日本との戦争を辞せず」と一時エキサイトした。しかし、その後は沈静化して日本との連携を重要と考え始めたようで、最近総統は「日米安全保障条約はアジアの安定に重要」と述べたと伝えられている。台湾での世論調査を見ても「日本に親しみを感じる」が六十九%、「大陸中国は非友好的と考える」五十二%、「中国への統一賛成」は九・八%と一割を切っており、世論の現実を国民党も無視できないようだ。大陸中国から執拗な圧迫を受けながらも、「台湾の主人公は台湾人だ」としぶとく頑張っている。

日清戦争後の下関条約交渉時に李鴻章が「化外の地(文化文明の外の土地)」と表現した未開の地台湾を、日本は統治した五十年間に莫大な国費を投じて南方の要めとして整備した。マラリアなどの風土病やアヘンの撲滅、病院・医学校の整備、教育の普及、上下水道や道路・鉄道・港湾・ダム・発電所の建設、製糖業の振興、蓬莱米など品種改良、金融機関の整備など近代国家の基礎作りを進めた。他に日本が台湾に齎した大きな影響は法治国家として遵法精神、清潔、公平、責任感、勤勉および誠実さなどと言われている。元台湾総統であった李登輝氏は日本精神の中心は武士道であり、その真髄は「正直で嘘をつかない事だ」と看破しておられる。

残念ながら日本は大東亜戦争に敗北し、マッカーサー元帥の命令で台湾は国民党蒋介石に託された。しかし国民党によって光復(名誉ある祖国への復帰)のスローガンのもとに行われた人治政治は、密告・密殺・賄賂が横行する恐怖政治(白色テロと表現される)であった。千九百四十七年に起こった二・二八事件では政府発表で三万人以上、民間の推定では五万人以上が殺された。治安の悪化の為に日本統治時代には生け垣で住んでいた民家の周囲に、国民党時代にはコンクリート壁を作った、その最上部にはガラス片を張り付け、窓には鉄格子が必要になったという。

国民党一党独裁のもと戒厳令は四十年間続き、千九百八十七年に李登輝氏らの努力によってやつと解除された。この国民党時代の影響なのだろう、現在の台湾国旗

（国民党の青天白日旗）は十一月二十五日に日台合同の慰霊祭（台中市宝覺寺）で見た他には、官庁を除けば街中に見掛けなかった。国旗は店でもほとんど売られておらず、お土産でも国旗の描かれたものは捜し出せなかった。台湾住民の複雑な心情が垣間見られた。

終戦後国民党の命令で日本本土へ強制帰国させられた日本人は軍族約十六万人、民間人約二十万人で、一人当たり千円の所持金と行李二個の身回り品の持ち帰りが許されただけで、土地家屋や宝石貴金属、カメラなど私有財産の他、多くの会社企業も全て没収された。その総額は当時のお金で百九億円とも百五十六億円とも言われる。この私有財産の没収は明らかな国際法違反である。没収財産は国民党一派が山分けして、国民党現有資産約二兆五千億円の原資になった。なお、私の義兄の家も当時の台湾からの帰国者である。

戦後日本本土の国籍者は日本に強制帰国させられたが、台湾に残った内省人はすなわち「帰らなかつた日本人」である。台湾が辿ってきた歴史を見れば、台湾人が親日的な理由をよく理解できる。何はともあれ、着々と軍備を増強する権略詐謀の帝国主義大国、中華人民共和国に近接している島国の台湾と日本が、将来何時まで生き残れるか危惧されるが、台湾の運命はすなわち日本の運命であることは確かである。

第十一次日華(台)親善友好慰靈訪問の旅に参加して

篠原 章好

第十一次日華(台)親善友好慰靈訪問の旅(以下、慰靈訪問の旅という)への参加は、はじめての台湾の旅であった。"世界で一番親日の国"であることは、聞き知っていたが、台湾についての詳しい情報も予備知識も殆どなかった。

不安をもって始まった台湾の旅は、慰靈巡礼と親善交流を目的とし、団長以下同じ気持をもって参加された三十二人の同行者に恵まれ、ガイドや添乗員の行き届いた案内や世話に支えられて、終ってみれば、快適で有意義な旅となった。何よりも、現地各所での台湾の方々の親切は、心に染みて忘れられない。

いま一つ、この度の四泊五日間の旅は、日本の台湾統治時代の過去の事実を見聞し、その真実に触れる貴重な機会となった。歴史の生き証人に会ったような感慨を覚えている。

以下、このことについて、二つのことを述べて"旅行の感想"に代えたい。

〈その一〉

大東亜戦争で従軍した台湾人元日本軍人軍属の戦死者が英霊として祀られ、毎年、関係者によって慰霊されていることや、台湾の地で殉じた日本人元軍人の遺骸が、地元の人々によって手厚く葬られ、その後、祭神として祭祀されていることを知り、大東亜戦争に対する台湾の人々の思いが付度できたこと。

慰靈訪問の旅の最大の目的は、十一月二十五日(水)、台中・宝覺禪寺の"靈安故郷"(李登輝元総統筆)英魂碑前で催される「台湾人元日本軍人軍属戦没者大慰靈祭」に参加することである。

"靈安故郷"英魂碑は、大東亜戦争を志願し元日本軍人軍属として従軍して戦死した人々を祀る場所を、台湾に設けたいという台湾人元日本軍人軍属の戦友会が、昭和六十二年(千八百八十七年)戒嚴令が解除されたのを機に、その実現に取組み、日本の戦友会(中日南星会、中日海交会)の協力を得て、平成八年(千九百九十年)十一月二十五日、有末精三(元陸軍中將)の筆になる"英魂觀音亭"を建立、その側に建てたものであり、毎年十一月二十五日には恒例として、台湾戦友会の主催によって、「台湾人元日本軍人軍属戦没者大慰靈祭」が開催されている。

今年の"大慰靈祭"は、台日海交会の主催で、台湾駐日代表等の来賓の臨席と、台湾慰靈訪問団の他、愛知県尾張海交会や石川県海交会等の列席の下に、国歌(台湾・日本両国歌)斉唱で始まり、海軍旗掲揚・敬礼、主催者(会長)挨拶・献花、参列各団体代表献花・祭文または追悼文奏上、台湾駐日代表献花・感謝と追悼の言葉、読

経、英霊御位牌収納、献杯、主催者のお礼の言葉で終わり、次第に則り厳肅かつ盛大に執り行われた。この中で、台湾慰霊訪問団の小菅亥三郎団長によって、参会者の胸に響く格調高い祭文の奏上もなされた。

この主催者が、大東亜戦争に日本軍人軍属として従軍し、共に戦い国に殉じ戦友の御霊・英霊に対して、感謝の誠をもって慰霊・顕彰されている姿が印象的で、深い感動を覚えた。

翌日、慰霊訪問した烏来の「高砂義勇隊戦歿英霊記念碑」も、大東亜戦争で先住民高砂族によって編成された（志願による）高砂義勇隊の戦死者三千余柱の英霊の追悼とその功績を称えるため、高砂族の一種族タイヤル族の蕃社酋長ターナ・タイモ（元日本陸軍兵曹）の発願によって、平成四年（千九百九十二年）十一月に建てられたもので、その後、毎年十一月には慰霊祭が行われているという。

また、新竹・南天山済化宮（十一月二十五日（水）慰霊訪問）では、靖國神社に祀られていた大東亜戦争で戦死した台湾出身の英霊二万八千余柱を分祀し「英霊華蔵殿」に祀り、霊牌を「地塔」に安置している。

一方、台中鎮安堂飛虎將軍廟（十一月二十三日（月）慰霊訪問）や高雄・保安堂（十一月二十二日（日）慰霊訪問）では、台湾の地に殉じた日本人や日本軍人の遺骸が、地元の人々によって手厚く葬られ、後に、祭神として廟・堂に祀られている。日本軍人戦没者に対して、崇敬の念を表し、敬虔な祈りを献じ続けて下さっている地元の方々に、深い感謝の念を覚えたいのである。

これらのことから、日本の統治時代を経験した台湾の人々は、この戦争を些かも不正義の戦い（東京裁判によって固定化された日本の侵略戦争）とは思っていないのではないか。むしろ、大東亜共栄国の樹立を理想として掲げた、国を守るための戦争であったと信じて戦ったのではないかと思われる。

それ故にこそ、戦後六十有余年を経た今も、日本軍として従軍した台湾の人々が、このことを誇りに思い、日本への愛情を持ち続けているのだと考えたい。

いま、あらためて、平成六年（千九百九十八年）の第八回「戦没者追悼中央集会」での黄昭堂博士（当時、昭和女子大学教授）の次の発言が、瑞しく蘇えり強く胸を打つ。

（日本が敗戦したと同時に、我々台湾も敗戦しました。靖國神社には台湾人の元日本兵士二万八千柱が眠っておられます。私はもちろん、台湾人の英霊だけでなくすべての英霊に黙禱を捧げました。

英霊たちは、侵略しているんだ、という気持を持ちながら戦いにいられたのでしょうか。違います。多くの兵士は、自分の祖国を守るために、あるいは、これからのよりよき世界を創るために、命を捧げられたのです。ところが戦後五十年近くの間、日

本は侵略国と罵られ、他人が罵るだけだったらいざ知らず、日本人自身が罵っております。こうゆう状態を続けて、果たして将来はあるのでしょうか。」

〈隣は中国から、遠くはイギリス、アメリカ、スペイン、オランダみんな侵略戦争をやってきた国です。この国々が、いつ、どこで、謝罪をしましたか。なぜ日本だけが批判されなければならないのですか。〉

〈日本政府は台湾を無視しつつけて、どうして中共の顔色ばかり窺っているのですか。これが二万八千人の台湾人が尊い命を捧げた国の正体ですか。日本の国会が謝罪をすることは、日本の戦死者ばかりではありません、台湾人の戦死者への冒瀆でもあることを銘記してもらいたいと思います。〉

日本人の一人として忸怩たるものを感じつつ、台湾の方々の思いを代表するこの心情に、誠実に応えなければならぬと思う。そのためには、今更ながらも、日本人の一人ひとりが、「明治以後の日本の歴史を一方的な侵略戦争と断罪する」「東京裁判史観」の呪縛から、一日も早く解き放たなければならないことを痛感する。

〈その二〉

日本統治時代、農業基盤整備のため大規模な灌漑水利工事を完成させ、台湾の発展に尽くした日本人技師の功績を称え、遺徳を偲んで、現地の人々によって建てられた日本人技師の銅像・技師夫妻の墓と、今も現役として残るダムを訪ね、先人の偉業を知るとともに、日本の台湾に対する統治政策の一端を、垣間見ることができたこと。

台南の「烏山頭水庫（ダム）」を訪ねることは、この旅のもう一つの大きな目的であった。「十一月二十四日（火）慰霊・見学訪問」

ダムの北岸に「八田與一・外代樹之墓」（「八田夫妻の墓」）が建てられ、墓のすぐ前には、作業服姿で腰をおろしダムを見下ろしている八田與一技師の銅像があった。

八田夫妻の墓は、嘉南の人々が夫妻の遺徳を偲び、昭和二十一年（千九百四十六年）十二月二十五日、この地に建てたものであり、八田與一技師の銅像は、八田の功績を永久に記念するため、昭和六年（千九百三十一年）、地元の人々によって建てられたものが、戦争末期の金属供出を避けるために隠され、また国民党政権下では、日本人銅像や碑類の破壊から守るため密かに保管され、昭和五十六年（千九百八十一年）一月になって、人々の前に再び姿を現し、ここに建立されたという。

「八田與一・外代樹之墓」の前では、この墓が建てられた翌年の昭和二十二年（千九百四十七年）から、毎年、八田與一の命日（五月八日）には、嘉南大圳農田水利会が主催する八田與一技師の慰霊追悼式が行われている。

近くに、八田技師の業績・遺徳を後世に伝えるための「八田技師記念室」が平成十三年（二千一年）五月八日に開設されていた。

ダムに続く道路脇の高台には、昭和五年（千九百三十年）五月末に、烏山頭交友会

（会長：八田與一）によって建てられた「殉工碑」（工事のため亡くなった日本人・台湾人とその家族等百三十四名の名前を差別することなく刻んでいる）がある。

この道路の奥に「珊瑚潭」とも呼ばれている「烏山頭水庫（ダム）」があった。静かに水を湛えている土堰堤式ダムこそ、八田與一技師が計画し、精魂を傾けて建設した、当時、東洋一といわれた巨大ダムである。

八田與一技師について、迂闊なことながら不勉強であり、一年半前までは名前すら知らずにいた。「心底から台湾を愛し、台湾で最も愛されている日本人である」ことも、このたび初めて知った。

元台湾総統李登輝氏は、八田與一技師の業績を称えて台湾に寄与した日本人の第一位に、八田與一を挙げているという。

あらためて、八田與一の偉業をなぞってみる。

八田與一は、明治十九年（千八百八十六年）石川県金沢の生れ。東大で土木工学を学び明治四十三年（千九百十年）二十五歳で卒業。卒業と同時に台湾総督府土木技師として赴任した。

台湾総督府の技師八田與一は、「嘉南平野開発計画書」を作成。その内容は台南市の北を流れる官田溪の上流の烏山頭で川を堰止めて、嘉南平野（面積約十五万ヘクタール）の水源として巨大なダムを造り、同平野に大小様々な給排水路（総長一万五千軒に及ぶ：万里の長城の長さの約六倍）を張り巡らすという壮大な計画であった。

この計画書は総督府に認められ、大正六年（千九百十七年）に詳細な現地調査と測量に入り、これを経て大正九年（千九百二十年）九月に、この大規模な灌漑水利工事が着工された。八田技師は請われて総督府を一旦辞任し、この工事の責任者（所長兼監督）となって工事全般の指揮をとり、幾多の困難や障害を克服し、十年の歳月と五千四百万円の巨費をかけて、昭和五年（千九百三十年）に完成させた。（八田は大正十年四月、烏山頭の宿舎に家族とともに移り住んでいる。三十五歳のときであった。）この工事の完成によって、それまで不毛の地といわれた嘉南平野は、肥沃な地となり台湾最大の穀倉地帯（台湾農地の六分の一の広さ）に生れかわり、約百万人の農地に恩恵を齎すことになった。

嘉南平野に張り巡らされた給排水路と烏山頭ダムを総称して「嘉南大圳」といい、この水利事業を自らの使命として、心血を傾注し、常に工事の先頭に立って作業員と共に汗を流し、遂に完成させた八田與一技師は、地元の人々に「嘉南大圳の父」と慕われている。

因みに、八田技師の台湾農業への貢献は、これだけではなく、農地の地質の改良、農業知識の普及・増進による生産性の向上、三年輪作法の考案など多方面にわたっていた。

ところで、水利事業は、農業基盤を整備する国の重要な事業の一つである。嘉南大圳にみられる大規模な灌漑水利工事も、当時の台湾統治政策として行われた代表的な工事であったことが推察され、ここに優れた人材・八田與一の活躍があった、と見るべきではないか。

八田與一が技師としてかかわった偉業を通して、日本の台湾での統治政策の一端が垣間見えてくる。このことから、日本の台湾統治の実態は、戦後教科書に書かれている圧政と収奪・掠奪と隷属の状況ではなかったのではないかとということが考えられる。

十一月二十三日（月）、台南の「奇美博物館」を訪ねた。この博物館は、奇美実業会長によって建設（「企業活動の利益は社会に還元すべきだ」という理念に基づいて）されたもので、入館料は無料である。

八階建てのビルの五、八階に、蒐集された数多くの絵画、陶磁器、彫刻、古武具、楽器、古民具（家具）や鳥・動物の剥製などが展示されていた。許会長が尊敬されているという後藤新平、八田與一の銅像や、日本刀、鎧等も収蔵・展示されており、許文龍氏の日本文化に対する造詣の深さや、日本精神への思い・親日の心情が窺えてならなかった。

展示品鑑賞の最中、慰霊訪問の本隊とはぐれてしまい、許会長の挨拶・お話を聞くことができなかったが、お土産として恵贈いただいた『台湾の歴史』（許文龍氏の社員教育講座での講演録等を集録した小冊子）は、歴史の生き証人を得た思いがしている。

この小冊子には、日本が台湾統治時代に台湾に対して行った、統治政策が具体的に公正な立場で語られている。

これによれば、日本は台湾を日本の領土の一部と考えて、莫大な人力と財力を注入して、社会基盤・産業基盤の整備を進め、さらに、治安の安定、衛生・医療の向上、教育の普及、法制度の確立を図って諸施策を推進したという。

また、台湾統治のために優れた人材を派遣したが、彼らの多くは日本精神（武士道）を備え、清廉で遵法精神に徹し、高い志・使命感と溢れる情熱、深い愛情をもって施政にあたり、また、職務に励み、尊敬と信頼を集めた。

日本の台湾統治にあつては、「一視同仁」の理念があり、基本的には台湾人と日本人の間には大きな差別はなかったともいわれる。

つきるところ、日本による台湾統治は、台湾の人々を日本に同化させ、民生を向上させるとともに、台湾の近代国家の基礎づくりを果したと見ることもできる。

親切的な台湾の人々の日本人への不満は、日本の統治時代に対してではなく、戦後、簡単に台湾を切り捨てたことに対するものだという。

今度、台湾を訪ねて、このような歴史の事実は無知であることを知った。このこと

に、まず驚くとともに恥ずかしくも思っている。

心から日本と日本人を敬愛し、日本人であったことを誇りとされている許文龍氏の、次の忠告の言葉を、励ましとして聞こう。

〈日本に望みたいことは過去に対する自信を取り戻してほしいということですね。それには過去に対する正しい認識を確立することです。黒船・明治維新から現在に至る日本の歴史を振り返ることが大切だ。大東亜共栄国という構想は間違っていないかったことをもう一回政府あたりがきちんと説明すべきですよ。

やはり、ここでもう一度植民地時代の台湾をどうだったのか、当時の日本人がどんなことしたのかを勉強し直してほしい。戦前のことを頭から間違いだと思わないで、そこから将来に進むべき道を探し出してほしいと思います〉

今回の台湾慰霊訪の旅は、日本人としての目覚めと気付きの旅となった。「東京裁判史観」の刷り込みによって、「大東亜戦争史」が否定され、「太平洋戦争史」が強制されていることにすら無抵抗であった。確かな史実に基づく正しい歴史認識が必要なのに。

当面の最大の課題は「東京裁判史観」から如何に解放するかである。いま、「大東亜戦争史」を学ぶことの必要性に気付いた。このことの意義は大きいと思う。

最後に、このような価値のある台湾との交流事業を創始され継続されている小菅亥三郎団長の崇高な理念と卓越した実行力に、心から敬意を表すると共に、事務局の皆様方の心の行き届いたお世話に対し、深い感謝の念を捧げ、本事業の今後のさらなる充実と発展をお祈り申し上げます。

また、お世話になった台湾のすべての皆様に、厚くお礼を申し上げます、日台の交流が一層深化されるようお祈り申し上げます。

慰霊訪問の旅にて

冬の巴士わだつみの声聞こへしか (墾丁・ガランピー岬)

鎮魂の花漂へり冬の巴士 (墾丁・巴士海峡)

冬日さす「嘉南大圳」父の像 (台南・烏山頭水庫)

戦友(とも)集ひ御霊を祀る小春かな (台中・宝覺禪寺)

冬の峰戦士の御霊讃へけり (烏來・高砂義勇隊戦没英霊記念碑)

台湾の軍属慰霊団に参加して

下田 健一

去る十一月二十二日から二十六日までの軍属慰霊訪問団に初参加致しました。今回は、第十一次となる訪問団でしたが、これまで何度となく、産経新聞でこの訪問団への参加募集をされていたのに気付かず、大変失礼いたしました。今回のご縁は、日本会議主催の講演会で、「第六回台湾特別講演会」のお知らせを受け、その会合に出席させて戴き、『黄文雄先生』のお話をお聞きしました。その場で、今回の募集を知り、帰って翌日、早速、夫婦で参加申し込みを致しました。確か第一号だったかと思えます。それ位早く、結論が出せましたのは、私たち夫婦は、当然のこととはいえ、上京の時は、必ず靖國神社に参拝してから全ての行動を起こすと決めております。

そこに眠っておられる英霊の方々のお陰で、今の日本があり、そして私達が幸せに暮していけるという、感謝の気持ちを表しています。その思いで、台湾の方々が、日本人となって大東亜戦争を戦われ、命を捧げられた方々の慰霊をしなければ、片手落ちで、台湾の国民に申し訳ないという気持ちでいっぱいになりました。従来、台湾には三度行きましたが、岳父が台湾での教育者であった事から、その度々に熱烈な歓迎を受けて、素晴らしい親日家がおられると感心しておりました。その際には、観光を兼ねて、故宮博物院、忠烈祠、日月潭、宝覺寺、飛虎將軍廟、澄清湖、奇美博物館、烏山頭ダム、八田與一記念館、二・二八記念館、明石繪督墓所 等を訪れ、日本人が祀られていると分かっている所では、丁寧に手を合わせては参りましたが、国旗掲揚や国歌斉唱による正式な参拝は出来ていませんし、その内容も一部を除いては、理解している人と会えず、このように十回にも亘り正式慰霊式をなさって戴いているとは、ただただ、感謝と驚きです。今回の団員の中にも、かなりの御高齢の方がおられますが、凄く元気で、先頭に立っておられて、戦時中のことや終戦時のことまで、詳しく教えて戴き、歴史に疎い私達にとってはありがたく思っています。

現地では、各地で大歓迎を受けましたのも、小菅団長の強い思いと長年に亘る信頼関係の構築にご努力されたことへの感謝の念を込めた言動であると確信しました。

また次回も是非自身は参加したいという想いでいっぱいですが、出来るだけ若い人を説得できて、連れて行き、益々の日華(台)親善友好を図れればと考えています。

日華（台）親善友好慰霊団に参加して

下田 純子

日台の魂の交流十周年第七回台湾特別講演会『黄文雄先生』の講演後の帰りに、主人と二人で参加させて戴こうと決めました。そして本当に参加して、感謝と感激で一杯です。と言いますのも、私が台湾と日本人の先祖に対する想いが人一倍強いからです。それは私の祖父母が大正時代に台湾に渡り、母が生まれ、私が生まれたからです。（十ヶ月の時引き揚げています）

祖母は、台湾に行つてまもないころは、毎晩、お月様を見て、日本へ帰りたいたと涙していたと言っていました。でも、祖父が造り酒屋を興し、台湾の貧しい人たちを沢山、雇つて食事を作り、また、子供（私の母達）も次々と生まれ、毎日忙しく、赤ちやんの産着も生まれたその日に自分で縫つたと話してくれました。そうしている間に、酒屋も少しずつ良くなり、道路を造つたりするのに、沢山のお金を寄付したりして、台湾の人から感謝されていたと聞いて育ちました。又、母達も学校へ行き、多くの台湾の方達とも仲良くし戦後も良く行つたり来たりしていました。

一方、父は、台中師範を出て、台湾で先生をしていました。こちらにも、生徒達から、大変に「先生、先生」と大事にされ、当時赤ちゃんだった私が、五十歳代の時、台湾を訪れた時も、先生のこどもと違って、驚くほどの歓迎ぶりでした。又、父が勤めていた学校を外から眺めるだけでいいということで見つけたところ、（雨と車椅子と九十一歳と高齢にも拘わらず）教え子の長男さんが、『先生、ちょっと待って』と車から降りて、なんと、校長先生を門の所まで連れて来て下さった。この心遣いがあったかった。その学校の、女校長先生が『先生（父のこと）、今も、先生達の教えを守つて教育しています、ご安心下さい、ありがとうございます』と言つて戴きました。その時、父曰く、「僕達は、特別なことをした訳でない、普通に教育をしただけなのに、台湾の人は、こんなにも喜んでくれる、ありがたい事だ」と。この言葉の中に、日本人と台湾人の共存共栄の關係が表されていると思つています。この様な精神の絆をつなげる為に、私達個人では、到底かなわないと思つていた矢先に小菅団長が日台の先祖の思いを込め、『日華（台）親善友好慰霊訪問の旅』を十年もお忙しい中を続けていらつしやるご縁に恵まれ、とても感謝しています。訪問した先々で、六十四年経つた今でも、日本人に感謝して祈り守つて下さっている台湾の人々に出会い、胸が熱くなりました。そして日本人よ、『あなたの方のご先祖は素晴らしかった』と自信を持つて堂々と生きることが大事な事と日本人として働いて下された台湾軍属の方々の慰霊をすることが日台の幸せに繋がることと確信しています。訪問した先々のことは、鮮明に私の胸に焼き付いています。それを、後日、文章として子孫に書き残し、伝えていきたいと思ひ

ます。今回出会った方々、又陰ながら準備をして頂いた日台の関係者の方々、全ての方に感謝申し上げます、今後、日台親善の為に働きたいと思えます。ありがとうございます。

一 蓮托生の日台

高原 弘之

日本会議の機関誌「日本の息吹」で団員募集の記事を拝見、初参加となった。以下、慰問について、所感の一端を簡略に述べます。

二日目、台湾最南端ガランピ岬の崖つ縁太平洋とバシー海峡が交叉する海域、敵国アメリカ潜水艦による魚雷攻撃で多数の艦船が撃沈され、今なお多くの英霊が海底に眠っている旨、団長より事前説明有り、献花に続き、身の引き締まる思いで黙禱、後ろ髪を引かれる思いで当地を離れる。

三日目、烏山頭ダムを訪れる。ここ台南市周辺の嘉南平野は、雨季には豪雨の度氾濫、乾季には水不足で作物の育たない不毛の地を、作物の宝庫として生まれ変わらせた、八田與一氏の功績は絶大である。氏の業績は今なお台湾の人々に、最も慕われている日本人の一人であろう。明治の気骨と、飾ることのない性格ではないかと勝手に拝察し、親しみを覚えた次第。

四日目、最大の目的地「台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列の為、宝覺寺に到着。事前に日本人墓地前で慰霊式を斎行。

続く主会場の「霊安故郷」の碑前の慰霊式会場で慰霊祭が執り行われた。国旗敬礼、国歌斉唱、「海ゆかば」いずれの曲を聴くにつけ、身の引き締まる思いと、日本人としての揺ぎない誇りを痛感した次第である。

五日目、高砂義勇隊戦没英霊記念碑を慰霊。

高砂族とは台湾原住民十二族の総称である。正確にはタイヤル族で、土地名のウーライとは、ここに住むタイヤル族の言葉で「温泉」を意味する。

戦時に、ジャングル戦に投入された高砂部隊は、勇猛果敢に戦果を発揮し、ジャングル戦における最強の部隊と謳われた。英霊となつて霊安故郷に眠る。

この台湾の地で、先人たちの偉業を称え、祭られた祠が多数存在、関係団体及び地域社会により維持管理がなされ、毎年法要が執り行われている。

戦後六十四年を経た今なお、報恩供養の念を持ち続けておられることに、感謝と敬愛の念を禁じえません。

今日の台湾発展に多大のご尽力された元台湾軍人、及びご家族の皆様から各所で、身に余るご厚情、お土産、資料等を賜わり、厚く御礼申し上げます。

最後に今回の慰霊訪問の旅では、大変有意義な体験を得ることが出来ました。

小昔団長をはじめ、事務局の方々に大変御世話になり、有り難く厚く御礼申し上げます。

明治人の偉業とこれに応える現地古老の人々

谷尾 侃

予ねて蔡昆燦氏の「台湾人と日本精神」、自ら日本軍人と名乗る鄭春河氏の手記等を通読して、正に教育勅語の権化とおも云える元日本人の方々に深い友情と尊敬の念を覚えていたが、昨年、本年と本旅行団の一員として台湾を訪れて、改めて現地古老の方々の心情に接して、心底から日本人であったことを懐かしみ、且つ誇りとしておられるのを知り、ここまで心酔せしめた先人の在りし日を思い、吾人の現生活を反省せしめられた。

今回、奇美実業会長・許文龍さんから自著「台湾の歴史」、拓殖大学池田憲彦教授との対談「台湾における後藤新平を考える」と二冊の小冊子を頂戴した。又昨年訪台してから自ら余りにも台湾を知らなかったと反省し、名越二荒之助他編の「台湾と日本・交流秘話」、許國雄著「台湾と日本がアジアを救う」等を通読してみると、領台後の日本政府の施策が明治天皇の一視同仁の大御心に発し、更には植民地経営の範として日本文化の高さをも世界に認識せしむべきとの意志も働いていたと推察されている。又、許文龍氏は後藤新平氏が医学を修めた自然科学者で生態学を加味した下情に即した施策を採用した事が世情の安定、産業の振興に大きく貢献したものと推論しておられる。

私は戦前の日本人一般としての任務絶対主義の奉公精神を大きく評価したい。為政者、教育者、産業者、それぞれに台湾勤務を命ぜられると選ばれた者としての高揚を伴い、最高の力を發揮しているように逸話の多くから感じられる。

今一つ、大きく採り上げねばならないのが台湾の人々の素直さ、温かさである。吾々の交歓会における接遇に見られる温かさは内地における旧い交際の会合と何ら変るところがない。昔の教員の九十%は教え子の謝恩会で台湾に迎えられているだろうと許文龍氏が話しておられる。又、氏は台湾に貢献した日本人の事績を顕彰して双方の戦後世代に知らしめる活動もしておられる。後藤新平氏の他、最後の台南市長羽鳥又男氏、上下水道の普及を進めた浜野弥四郎氏、台湾紅茶を振興した新井耕吉郎、二峰ダムを築いた鳥居信平氏等の胸像を製作し生誕地と活躍した現地の双方に設置し、その功を永く讃えるべく施策しておられる。(鳥居信平物語―平野久美子)

真に行届いた処置でその思慮の深さと人情の厚さには頭の下がる思を禁じ得ない。これを感じられて親善友好慰霊訪問団を結成、十一年間欠かさず実行しておられる団長・小菅亥三郎氏に満腔の謝意を捧げると共に微力ながら老骨に鞭打って本行事の継続に少しでもお役に立つよう努力することを誓って挨拶としたい。

ほんとうに有難うございました。

台湾よ永遠なれ

戸田 幸雄

雲海の 白き 輝き 下に見て
英霊の待つ 華麗の島へ

数多^{あまた}なる 流れ着き来し 同胞の
霊姿呼ぶや バシ―海峡

椰子の木も 頭^{こぶか}を垂れて 喪に服す
ガランピ岬 天地拳がりて

済化宮 心込めたる 神拝^{しんぱい}詞
永遠に護れや 緑なす島

ひたすらに 生命捧げし 銅像の
姿尊し 鳥山頭^{トウ}ダム

海交会 星霜を経て相見^{あいまみ}ゆ
もののふの姿 今も美し

美しき 精魂込むる 美術品
奇美の館に佇みており

飛虎廟や 歲月越えて 護らるる
拝むにに 満たされており

高砂の 勇敢さをば 未永く
歴史に止め 伝うべけんや

龍の舞い 塩水小の 子ら踊り
涙こらえて 拍手するなり

燃ゆるごと 溢れる想い いや増して
交わりの時 惜しまるるな

初めての訪問団参加を終えて

中村 哲

私はこれまで何度か訪台していますが観光が主となっております元駐日大使の許世楷先生の本の中に「台湾は日本人が日本自身を発見できる国です。自分たちの祖先の偉業や歴史を見ることのできるごく身近な隣国なのです」との言葉を知って親善慰霊はもちろんのこと訪問団に参加しての再確認の旅でもありました。今回初めて日華親善友好慰霊訪問団の一員として訪台し台湾の人々の熱烈な歓迎と暖かいおもてなしに驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。最初の訪問地高雄保安堂では事前に小菅団長からお話をお聞きしていたとはいえ現地の方の歓迎振りにはびっくりしました。何よりも今回の訪問を通して日本人としての「心」お持ちの方々との出会いはとても勉強になりました。

塩水小学校では我々訪問団のために子供たちが三ヶ月も前から練習していた太鼓や蛇踊りの出迎え元気な子供たちの笑顔きれいな瞳に嬉しくて涙が出たのは私だけではないでしょう。「校長先生 子供たちありがとう 観念」

宝覺寺における慰霊祭および日本人墓地での慰霊式も厳粛に行われ各地からの参加者の他一般観光客も積極的に焼香されていたのが印象的でした。今日まで墓地の管理につくされてこられた台湾海交会関係者の皆様には大変なご苦労があったことと思うと頭の下がる思いがいたします。

各地における慰霊式、慰霊祭において国旗に注目し国歌を参加者全員で斉唱し「海ゆかば」を聞きながらの黙祷、なぜかしら言葉でいい現すことのできない緊張と感激からか目頭が自然と熱くなるのは日本人としての『血』がなせるのでしょうか。

今日の繁栄と平和の礎となられた御英霊と戦後の激動の時代を日本精神を心の糧としてがんばって生きてこられた台湾の先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです

潮音時の慰霊式では東京から参加されていました前原様の戦死されたお父上とくしくも私の叔父が乗船した艦こそ違え同じように門司港を出港南方に向かう途中台湾海峡、バシー海峡を無事通過し東シナ海に差し掛かった海上で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け戦死しており叔父の慰霊をすることができました。このことを帰国後叔母に報告すると涙を流して喜んでくれました。

台湾の皆様とお話していますと『私は今でも日本人です』と異口同音に言われます。ほんとうに古き良き日本が、日本精神が生きているのだなと思えました。

訪問中お世話になりました数多くの台湾の皆様、たくさんのおみやげまでいただき本当にありがとうございます。今後も微力ながら日台友好親善の一翼を担いがんばって生きたいと思えます

第十一次日華（台）親善友好慰靈訪問団に参加して

永田 昌巳

慰靈訪問団に初めて参加させていただきました。スケジュール的には少し過密だったけど私にとつては充実した素晴らしい研修でした。

訪問地の先ざきで地域の方々に心温まる歓迎やもてなしを受け、又毎日昼食会を催していただいた台湾の友好団体の皆様に心から感謝とお礼を申し上げたいと思います。これも偏に十一年間の永きにわたって民間外交を慰靈という尊いかたちで続けてこられた小菅団長以下の皆様の実績によるものであるうと思えます。

台湾には親日家が多いとはよく耳にしていますがお隣りの韓国や中国、北朝鮮では反日国家であるし、今でも反日歴史教育を行っています。それなのに台湾は何故親日なのかという疑問が私の心の中に少なからずありました。しかし今回の訪問団の一人として当地を訪れてみて初めて日台の歴史の真実に触れ目から鱗がとれたようにパツと明るくなりました。

高速バスの車からみる圃場は見事に整備され稲やバナナ、ミカン、パイナップルなど豊かな実りをつけています。何とも美しい農村風景でありました。この素晴らしい農業の基礎整備を最初に手掛けたのは明治から大正の時代にかけて活躍した優秀な日本人技術者であったことを知り驚きであり、発見もありました。日清戦争勝利後の明治二十八年より日本の台湾統治が始まりました。それからというものは農村分野にかぎらず衛生面での改善、病院や学校、道路などインフラの整備に力を入れ、台湾の近代化の礎をつくったことを学ばせていただき日本人の誇りを感じさせていただきました。

台湾にはまだ敬虔な祈りや共同社会の営みが残っていました。保安堂（高雄）の御神体は日本軍艦の模型と艦長の頭骨であり、飛虎將軍廟のそれは日本空軍の飛行士、杉浦茂峯兵曹長です。双方とも海と空から台湾の民衆を守り、勇敢に戦った日本軍人であります。日本軍人はいまや台湾の人によって神として手厚く祀られていることに驚きます。日本人として深い感謝と敬意を表わさずにはいられません。

大東亜戦争以前のアジアの歴史は欧米列強による植民地支配の歴史でもありました。このような列強の略奪や搾取の植民地政策の中で日本はどのような政策をとっていたのだろうか。多くの日本人はその真実を知らないだろう。敗戦という負の遺産を背負う中で戦前の良き思いを語ることはもはやタブーにひとしい。中国におもねる反日教育、マスコミによる反日、反台報道は去る四月に放送された「NHKスペシャル、ジャパンデビュー第一回、アジアの一等国」にみられます。いかに歴史を歪曲した偏向番組であったか実際この台湾の地に立つてみて初めてわかることができました。

台南県の烏山頭水庫の堰堤に立った時、台湾の人々が日本人を真に尊敬していることを実感します。「嘉南大圳の父」と呼ばれる八田與一技師の高い技術力をそれと十年間という長きにわたって財政面で支え続けた日本政府の領台政策は立派としか言いようがありません。日台のダム建設労働者が明日を夢みてともに汗を流し合い働いている姿を想起する時尊いものに触れた思いにかられました。

東洋一の烏山頭水庫はセミハイドロリックフィル工法により築造され、今も土砂に埋まることなく満面と水を湛えている。ここから放水された水は二万四千キロにわたって張りめぐらされた水路を経て嘉南平野の十五万ヘクタールの田畑を潤し、六十万人の農民がその恩恵を受けているという。まさに台湾の豊かな農業の出発点ここにあるといっている。搾取なき統治、現地の人々との共存共栄の政策が国策として台湾にあつたことが直かに接してわかることが出来ました。

小高い丘に建てられた八田技師の銅像は一見ロダンの「考える人」に似ているが私にはこれからの台湾農業の発展を「見つめる人」にみえてならなかった。現地に身を投げた夫人と共に眠る墓前に万感の思いを込めて線香をあげさせていただいた。

旅の四日目、十一月二十五日は台中市の宝覺寺で行われた「大東亜戦争旧日本軍台湾軍人軍属慰霊祭」に参列した。日本軍人として戦没した三万三千余柱の英霊に対して追悼の誠を捧げることできた。靈安故郷の碑の前に立ち「君が代」を斉唱するのは初めての経験であり魂の琴線にふれる強い思いにかられました。

貴重な体験の中で今後の継続を強く思う反面、高齢化と「親中教育」の中で厳しい状況にあることも紛れもない現実です。

劉校長先生の塩水國民小学校を訪れることができた。将来を担う子供達の明るい笑顔、蛇踊り、鼓笛隊の温かい歓迎をいっぱい頂いたことは何より嬉しかった。言葉が通じない世代になったが、心が通じ合える世代をこの子供達に託したい。「大きくなったら是非日本において！」と帰り際に声をかけた。言葉がわからないので黄さんに通訳してもらった。子供達が大きくうなづく姿をみてバスに乗り込みました。

同行した妻の反応は「何かいいことをしてきたみたい」ということでした。旅を意義あるものにしていただいている小菅団長様をはじめ皆様にご心からお礼を申し上げます。

慰霊訪問に参加して日本人より逞しい

台湾の人々の気持ちを学びました

日高 誠

蒋介石が戦後日本の統治を悪とし、総ての財産を没収したが、それ以上に台湾人の洗脳教育を行ったと私は思います。米国が日本を占領し実施して来た最大のものは日本人の洗脳教育です。台湾の人々はそれに耐えて、やがて政権が変わっても、良いものは良いとし、悪いものは悪い、とする良誠を失わなかった。

私は今回初めて台湾に行ったが、その根本精神が存在することを身体で感じました。保安堂の話、潮音寺の話、飛虎將軍廟の話、烏山頭ダムの八田先生の話、奇美博物館の許文龍先生の話、勿論最初から宝覚寺に於る慰霊祭に参加する事が目的であったが、特に感心したのは境内に在った、日本人の遺骨安置所を見たことです。日本では各都市が米軍の空襲で戦争に合い、教え知れぬ国民が犠牲になったが、その遺骨は地域住民や地区のお寺で民間の人達が供養している。国家として何等実施して居らないのである。毎年八月十五日に日本武道館で慰霊祭が実施されて、天皇陛下以下政府要人も無宗教方式で実施されているが、日本遺族会の会員でなければ会場に入場出来ないのが実状である。私も兄が戦死しているが、厚生省の役人に阻止されて、くやしい思いをしている。戦争で一家全滅した友人も同様である。即ち湖塗している。

台湾の北・中・南から一万四千を集めて、然も外国人である日本人の遺骨を安置して下さって居る。天と地の差があるのではないか。

我々日本人が日本の為に戦死した台湾人の慰霊に訪れるのは当然の義務であると思ふ。

それにしても李登輝總統の偉大なる人物像には感心しました。明治の日本人の思いが致します。現在の日本には何処にも見当たらない。せめて団長である小菅亥三郎氏がその志を同じくする一人であると信じ、敬意を表する次第である。道中ヨチヨチ歩きの老人を労わって下さった団員のみなさんに御礼申し上げます。

日華（台）親善友好慰靈訪問の旅に参加して

前原 清美

この度、慰靈訪問の旅に参加できましたことを心から感謝いたします。特に念願だったバシー海峡を眺め、潮音寺では献花までさせていただき予期しないことで感動いたしました。感謝申し上げます。

バシー海峡を眺めながら父のことが浮かんできました。父が玉津丸の中を見せてくれた時のことです。上下間隔の狭い蚕の寝床のような将兵用ベッドや船底には重機のようなもの（戦車だったかも知れません）が沢山並べられていました。部外者は立入禁止だったらしく見張りの人に制止されましたが、父はその制止をふり切って私を船底へ連れて行つたのです。父がどんな意図でそうしたのか今となっては想像もつきません。当時家族は神戸に住んでいましたので船が神戸あたりに立ち寄った時のことだったのではないかと思います。この時が父との最後の別れになりました。国民学校五年の時でした。

父は若い頃、大阪商船（株）の南米航路の船乗りでブラジル丸、アルゼンチナ丸、ブエノスアイレス丸などのファンネルマーク「大」の字を掲げ移民船で働いたことが自慢でした。荒れる印度洋を超えケープタウンに到達した大西洋に入り、そこを往來していました。当時大阪商船では最も長い距離を走航するのはこの南米航路でしたので、三菱長崎造船所のディーゼルエンジンを最強で故障のないものにする願いがあつたようです。父は世界一のディーゼルエンジンを育て上げたと私に教えてくれました。私がおっと小さい頃には、父はよく湊川神社に連れていきました。神戸湾のすぐ近くにその神社があつたからでしょう。そこには「嗚呼忠臣楠氏之墓」とあるのを何度も繰り返し読ませました。又、皇居の一角にある楠正成の馬上像のところへ連れていったこともありました。私は父は「尽忠報國」の精神を教えたかったのだと思います。父は戦争が始まってから玉津丸に乗船するまでは、南洋からボーキサイトや生ゴムを運んでいました。

玉津丸は陸軍が設計した多機能高速船として三井造船の玉野造船所で製造されました。玉津丸に乗船した泉岳団の最強将兵が無事にルソン島まで輸送されていたら戦局はまた違っていたのではないかと思います。かえすがえすも残念でなりません。

台南では奇美博物館を訪問しました。許文龍様は芸術ばかりでなくあらゆる事に情熱をかけられ、博識で人間愛にあふれた方だと感じました。絵画のコレクションばかりでなく昆虫の蒐集にも熱心で、蒐集物の中に与那国島にいる「ヨナクニサン」と同じ蛾があつて私は昆虫好きですので興味を覚えました。

帰国後、許文龍様の『台湾の歴史』は一気に読ませていただきました。

その中に八田與一、児玉源太郎、後藤新平、明石大将、新渡戸稲造など台湾のために力を尽した日本の先人達が次々に現れているのに感動させられました。

また、「日本人は一番侵略性のない民族ですよ」「日本刀は美しい」と書かれているのにも感動しました。

この旅で台湾の方々に直接触れ、あちらの方々がこれほど私達に親しみをもっておられることにびっくりしました。

今後台湾のことをもっと知りたいですし、台湾との絆をもっと深めていきたいので来年もぜひ参加したいと思っています。

第十一次台湾親善友好慰靈訪問の旅に参加して

前原 照美

まだ余韻さめやらぬあの感動的な五日間を思い出しながら「人の思い」というものは何かを切り開いていくものだとしみじみ実感しています。

今回遂に私共は念願のバシ―海峡に立ち、潮音寺にお参りすることができました。その上団長様はじめご同行の皆様のご配慮により思いがけずも潮音寺の慰靈碑に献花までさせていただき、更にバシ―海峡に流れ込む川の橋の上から花束を投下させていただきますました。身に余るお心遣いを賜り心からありがたうお礼申し上げます。

慰靈碑の前で「海ゆかば」の曲を耳にしながら黙祷を捧げているうちに涙があふれました。この涙は団の皆様への心からの感謝と六十五年目にしてやっとこの地に立てた感激と興奮とが入り混じったものであったように思います。

ここ数年、私は義父の事がずっと気になっていました。写真でしか見たことのない義父については、「大阪商船（現商船三井）の輸送船玉津丸に一等機関士として乗船し、マニラへ向けて航行中、昭和十九年八月十九日、バシ―海峡で雷撃沈没戦死、三十九才」これだけしか知りませんでした。義母もすでに他界し聞くこともできません。玉津丸がどんな船だったのか。いつ船出をしてどんな状況で沈んでいたのか。将兵や兵器は、などもっと知りたいと思っていました。このままでは無念の死を遂げた義父がうかばれない。子ども達にも祖父のことを伝えることもできない。最近は特にその気持が強くなってきました。どこかに手がかりはないものかと。

そんな折、潮音寺の存在を初めて知ったのは昨年春頃、産経新聞の「談話室」の記事でした。すぐに切り抜いたものの紛失。悲しいかなお寺の名前さえ記憶していませんでした。

その数ヶ月後、日本会議の方から偶然潮音寺のことを耳にしました。救われた気持ちになり主人と共に是非一度訪ねたいと思ったのはこの時でした。

一方、玉津丸の事が気になっていった私は近くに出かけた折に、商船三井の本社を訪れました。小さな手がかりでもあればとあまり期待もせずに向ったのです。昨年九月の事でした。ところがあつたのです。事情を話すと係の方が何冊かの本を取り出して玉津丸の部分のコピーして下さいました。私は跳び上らんばかりの気持でありがたくいただいて帰りました。帰りの中央線の中でむさぼるように読みました。涙で字が何度霞みました。

その資料について少々長くなることをお許し下さい。玉津丸は九千五百九十総トン的大型上陸支援船で、船艙に上陸用舟艇を格納し敵前上陸に際し、船尾部が開口して

そこから舟艇を出すという従来にない独自の構想が盛り込まれていた。しかし竣工時期が遅くその本領を発揮する機会はなく専ら輸送に従事した。

玉津丸は昭和十九年八月十九日、ボヘアードール岬西北西九十キロに來た午前四時三十分、米潜の雷撃を受け沈没。乗員・乗船者四千八百二十名中四千七百五十五名が戦死し、陸兵輸送中の遭難では最大級の惨事となった。

玉津丸は初航海から半年の命だった。第三次航海まではマニラへの輸送に成功。第四次航海の昭和十九年八月六日、門司出航が最後の航海となった。

駐蒙軍の中核部隊として満州にあった第二十六師団の主力四千名以上を満載した玉津丸は伊万里湾でヒ七一船団に編入。この船団は比島防衛の兵力増強を目的とする泉兵団（第二十六師団）をはじめ多数の精鋭を塔載した高速船団であった。

船団は八月十日伊万里港出撃。十五、十七日、馬公に避泊。十七日馬公出航。高速を誇る十五隻の輸送船（タンカー二隻含む）と、それを取り巻く空母一隻を含む十三隻の護衛陣は圧巻そのもので盤石と思われたがその期待はもろくも崩れ去った。

日中は空母大鷹の艦上機が哨戒したが上空警戒のない夜は敵潜の狼群攻撃の脅威下で航海。この時期は低気圧のせいで海は荒れていた。バシー海峡に入った十八日、まづタンカーが被雷落伍。夜には空母大鷹が雷撃を受け爆発数回で沈没。各船は雷撃を免れるため全速で独自に避航を始める。間もなく帝垂丸が被雷沈没。空母の沈没で上空警戒がなくなった十九日に入ると二隻の輸送船が次々に被雷。

一方玉津丸は他船と離れてしまい視界不良の中を全速で航行していた。ボヘアードール岬西北西九十キロに來た午前四時三十分、玉津丸も遂にとどめを刺される。

突如雷跡二条を右百二十度方向に発見。船長は直ちに「取舵一杯」を指令。一等運転士は非常ベルを鳴らし、戦砲隊長は射撃命令を出す。この雷撃をかわした間もなく又も「魚雷右五十度近し！」に今度は面舵一杯を命じる。しかし舵効の出ぬまま米潜水艦スピードフィッシュの魚雷が右舷中央に二発命中。暁闇の荒海に激しい雨の降る中、船砲隊の火箭が暗黒の海に打ち込まれていた。玉津丸はなおも高速で進むが徐々に右に傾く。傾斜が三十度となり復元薄と判断した船長はブリッジを左右に往來して「総員退船」を命令。

この間三分。傾斜を増した船は被雷四分後に煙突から蒸気を出しながら水中に没する。

船長以下百三十八名の乗組員は三名を除いて全て船と運命を共にした。

運よく脱出できた部隊員の殆んども荒海に苛まれ、船が護衛艦から離れた位置にあったため救助の手が届かず絶望の漂流をする。助かった乗組員の二名が救命ボートに部隊員四十三名を救助して四日間漂流したのち護衛艦に救出された。

こうして遂に義父の最期を知ることができました。同時に六十五年前の悲惨な光景

は私の頭の中に鮮明に焼きつけられました。

それから丁度一年、バシー海峡を臨む高台に立ちました。目の前に広がるまっ青な海。悲しいほど美しい海でした。いつまでも眺めていたい海でした。ここには今も義父と同じような最期を遂げられた日本将兵二十五万と二百隻もの船が海底深く眠っているとの事。

今年一月、靖國神社の遊就館に遺影を掲げていただく事もできませんでした。そして仕上げとも言える潮音寺にお参りすることができて私共の心は不思議なほど落ちつきました。

ここに至るまで確かに予期しない偶然の連続でした。新聞記事から始つて「潮音寺」を耳にしたのも、玉津丸のコピーをいただけた事も、訪問団の事を『日本の息吹』で知つた事も。しかしその時は偶然だと思つていた事が今は「思い」の結果だったと感じています。そして私の「思い」は今回の参加でひと区切りがつけたと同時に、台湾との生命の絆を深めるといふ新たな一步を踏み出しました。

日華(台)親善友好慰霊の旅に参加して

松下 美佳

あの感動から、早二週間。台湾でのいろいろな出来事を思い起こしている。空港に降り立った時の暖かい空気、緊張の面持ちで乗った新幹線、初めて歌った国歌「君が代」、行く先々で山のように積まれていたお菓子と果物。そして台湾の方々の温かさ、純粹さ、何もかもが驚きと喜びの思い出となった。

思い返すと、小林よしのりの「台湾論」を読み、台湾に憧れ、人々との触れ合いとそこに根付く日本人の足跡と文化をこの目で確かめたいと思いつつ、ちょうど一年、その希望が叶った。そこには、飛虎將軍廟、烏山頭水庫、獅頭山勸化堂、東石富安宮が紹介されており、これら全てに日本人が祀られていることを知った。しかも、台湾の方が守って下さっていると。これまで私は、台湾の歴史を習った記憶が全くない。さらに歴史の中の日本には、漠然とした悪のイメージを持っていた。国旗を意識したこともなければ、国歌を耳にするのはオリンピックの時だけだった。そんな中で、日本語が話せる外国人が存在すること、しかも、親日であること、そして、私の感覚からは到底想像も出来ないような責任感と強さ、優しさ、それと、国のために忠誠を尽くすという、「公」の精神に溢れた日本人が過去には当たり前存在していたことを本から知り、あまりの衝撃に涙が止まらなかった。ここで、先人の方々への尊敬の念とともに、その血をひく日本人であることへの誇りが私の心に初めて芽生えた。そして、日本という国、また、日本人であることを意識するきっかけをもたらしてくれたのは、まさに台湾への関心だった。

訪台において特に印象に残ったのは、蕭錦文さんとの出会いだ。今年の夏、東中野の小さな映画館で、「台湾人生」というドキュメンタリー映画を見た。数人の台湾人がそれぞれに日本への思いを語る内容だったが、その出演者の一人である蕭さんと、二十五日の昼食の席で思いがけず、出会ったのである。映画の中で蕭さんは、日本兵として戦ったこと、白色テロによって、師範学校の助教授であったお父様が行方不明になってしまったこと、また、弟さんも銃殺されたこと等を語った。そして最後に、日本人は好きだけど、日本の政治家に対しては怒りを持っており、せめて一言、政治家からの謝罪を求めている、といった内容を力の限りに訴えていた。初めて耳にする台湾の方の生の声に、私の心は激しく揺さぶられた。その数日後、上映挨拶に蕭さんがみえるとのことで、再び私はその映画館に足を運んだ。一言蕭さんに、「感動しました。」と伝えたくて。しかし、上映前の挨拶のみで、映画を見終わった時には既に帰られた後だった。ボランティアをなさっている二・二八記念館に足を運ぶしか、お会い

する術はないと思っていた。ところが、その蕭さんをあの昼食会場で見つけた時は、奇跡だと思った。高まる気持ちを抑えきれずに、名刺を持ってご挨拶へ伺ったら、力強い語り口が、映画の中の蕭さんと全く同じで大変嬉しかった。日本統治時代、またその後の不遇な日々を生き抜いた蕭さんの姿を見て、先人の方々の真剣な生き様がリアルに感じとれたからこそ、私の心は大きく動いたのだろう。

ともすると、まるで異人種のように、価値観、ライフスタイル、そして発想そのものに、食い違いが起こる、親と私の世代。もつと合理的に、もつと単純に・・・と、そんな生き方がより良いものと感じていた。特に社会人となつて、尚、そのギャップを感じて、随分悩んだこともあった。しかしそこには、歴史への無知が根本原因にあったのではないかと最近痛感している。日本人が如何にして、日本文化を築いてきたのか、さらに、八田與一技師の烏山頭水庫にみる、あの広大なダムを「化外の地」に、如何に建設せしめたのか、そして、飛虎將軍廟の杉浦少尉の我が命よりも他の命を守るといふ重い選択を、咄嗟の判断で実行するといった偉業を如何に成し遂げることが出来たのか。事実を知れば知るほど、先人の方々は日本国を愛し、その国民としての強い信念と誇りを持って、生きていたのではないかと感じさせられる。このことは、従来の私には理解しにくい感覚であった。だからこそ、自分自身をしつかりと律し、国のため、家族のためにと生きていた先人の方々に尊敬せずにはいられない。もはや、私の価値観は百八十度転換してしまった。そして、日本人に生まれたことに、この上ない誇りを感じる。また、その誇るべき日本文化を台湾で根付かせ、日本人を大切に思い、祀って下さっている台湾の方々にも感謝せずにはいられない。

この旅で私は、当初の期待以上の日本に出会うことができた。戦争を知っておられる世代の方の大きな声、姿勢のよさ、几帳面な服装に至るまで、それを実感することができた。そして、憧れの日本人に少しでも近づきたいと願う日々である。

最後に、このような貴重な体験を実現させて下さった小菅団長様をはじめ、訪問団の皆様へ深く感謝致します。ありがとうございました。

第十一次日華（台）親善友好慰靈訪問団に参加して

松俵 義博・茂子

台湾慰靈訪問団に初めて参加してよい経験、体験をさせてもらって感動しました。行く先々で大勢の方々の盛大なお出迎えを受け会場には果物菓子お茶と夕食会も毎日で台湾の皆さんに頭が下がります。

思っても見なかった事ばかりで走馬灯の様に頭の中でめぐって来ます。台湾の方々の日本軍人として散華された三万三千余柱の事を知り海ゆかばの音楽を聞くたびに胸がいっぱいになりました。夢に見ましたきれいな広々とした青い海、若い人々が笑顔で元気で行って来ますと言っている姿……

最南端に行き、君が代、一分間の黙祷の間こみ上げてきて涙が止まりませんでした。

十一年間続けてきてこられた小菅団長と共にそれをささえてこられたスタッフの方々ご苦労様です。本当にありがとうございます。

この活動が長く続く事を頼って、私達も毎年参加出来、台湾の方々に接し友好の輪を広げることが出来ればと思っております。

台湾バナナ、みかん、手作りのオモチのおいしかった事等思い出多い旅でした。

今回参加させてもらった事に感謝

皆さんに出合えた事に感謝

又の機会を楽しみにしながら合掌。

慰霊訪問の感想

産経新聞社 力武 崇樹

戦後六十年以上を経過してもなお日本語を忘れることなく、台湾統治時代の日本人の偉業を日本人に代わって語ってくれる方々の姿は、私にとって衝撃的でした。「古典のひらがなのくずしぶりは芸術的。子供のころに習った日本語は美しかった」と懐かしんでいた葉蔭梅さん。「台湾の工業の発展があるのは、日本が互いに栄えようと台湾人に技術を教えたからだ」と熱く話してくれた胡順來さん。「日本でも台湾でも道德観念がなくなってきた。これから心配だよ」と嘆いていた林溪和さん。みなさん、今でも「日本精神」を宿し続けていました。

そうした戦前世代の方々と出会うなかで、ふつふつと沸いてきたのは日本の学校教育についての疑念でした。「台湾統治」という、長い日本の歴史のほんの一角マではあります。その教育に「偽り」があったことが体感的に確認されたからです。

歪な教育の背景に日教組の存在があることはしばしば指摘されることですが、その組織率がまだ四割前後を保った時代に、私も例に洩れず「戦前の日本＝悪者」との前提になる近現代史を教わりました。そこにイデオロギー対立による欺瞞が隠されていたことは後に知りましたが、最初に教わったことはなかなか心の底から拭い去れるものではありません。「戦前の日本」に対する不信感が、わずかではあっても残されていたのは事実です。

それが、林さんたちのお話を聞くごとに払拭されていきました。もちろん戦時中のことですから、日本の行為に負の側面がまったくなかったわけではないでしょう。しかし、日本の学校で「被害者」と教える林さんたちのような戦前世代が日本の統治を称えるとき、そこに「偽り」はないはずだ。

折しも発売された雑誌「正論」（平成二十二年一月号）に、日本による統治を十一歳まで経験した金美齡さんの手記「私はなぜ日本国民となったか」が掲載されました。金さんは戦前の日本兵との関わりを述べるなかで、「台湾人にとっての靖國神社」としてこう綴っています。

「父祖への感謝の念、その時代への愛惜の念、そうした人間としての自然な情感を持ち続けることだけでなく、靖國神社を今後も維持することは、後生を信じて散華していった父祖たちとの“默契”ではないのか」

日華（台）親善友好慰霊訪問団は毎年、小菅団長をはじめ「後生」を中心に結成されています。「父祖への感謝の念、その時代への愛惜の念」のみならず、「日本人として亡くなった台湾人への哀悼の念」による慰霊訪問は、まさに「默契」を果たすための旅だったのではないか。日本に戻り、改めてそう感じています。

小菅団長をはじめ、団員のみなさんからさまざまにご教示を受けながら台湾を訪問

できたことは、大変貴重な経験となりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

『日華(台)親善友好慰靈訪問団を代表し、

原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御霊の御前にて

慎んで祭文を奏上いたします。』

祭文

『凡生ヲ我國ニ稟クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルヘキ』(「軍人勅諭」より)
『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ』(「教育勅諭」より)

これは明治十五年の軍人勅諭と同二十三年の教育勅諭の一節であります。この中で明治天皇は、阿片戦争の勝利に酔う欧米列強の重圧をはね返し、新生日本を守り、世界に伍して建国していく御意志と、これを担うべく国民のあるべき姿をお示しになりました。

このような中で明治二十八年、台湾の皆様は日本人になりました。日清戦争に敗れた当時の宗主國・清が「鳥もさえずらない、木々には花も咲かない」といってこの台湾を「化外の地」と切り捨て、わが国・日本に永久に割譲したからであります。

爾来、日台両民族の渾身の努力により、わが国でも有数の豊かで慈愛溢れる地となった台湾は、欧米諸國の羨望の的となり、支那大陸における滿州國と同様に、国家建設のお手本とされるまでになりました。これは軍人勅諭として収斂されたわが國の武徳の伝統と教育勅諭に凝縮された民族共同体の理念を台湾の皆様が真心をもって受け止め、漲る意氣と使命感をもって体現されたからに他なりません。

しかるに、昭和十六年十二月八日未明の大東亜戦争勃発により台湾の運命は大きく変わりました。今、御英霊として眠っておられる皆様は、南海の島々や熱帯の密林においては欧米白人種と、また支那大陸においては蒋介石率いる重慶政権や毛沢東の共産匪賊と生死を賭けて戦った同胞でした。とりわけ七百倍ともいわれる難関を突破し、血書歎願をしてまで志願してこられた皆様は、日本人以上の日本人として歴史に残る勇猛果敢さを發揮され、敵を圧倒し悩ませたのであります。

国家・国民の総力を挙げた三年と九ヶ月にわたる戦いにより、わが國は國家の尊嚴と民族の名誉を死守し、大東亜解放の壮図を成し遂げました。とまれ、わが國が軍事的敗北を余儀なくされたとはいえ、四百年以上に及ぶ欧米列強の植民地支配に終止符をうち、アジアにおける全ての權益を失わせしめたのは紛れもない世界的事実であります。

これを偉業といわずして一体何と呼べばいいのでしょうか。わが國の国民として東洋平和のために共に血と汗を流した者同士の兄弟感・一体感はかくして形成されたのであります。台湾の皆様が五十年間の日本統治時代の伝統や文化、はては「大和魂」を高く評価し、これを日本精神として継承している世界に類を見ない親日的な国家・国民である由縁はここに淵源があるのです。

私達は、このような台湾の皆様と誠心に応えるためにも積極的に家族交流・兄弟交流を深め、その紐帯を今まで以上に強固なものにしていきます。それは今日の私達日本人に民族としての自覚と誇りを高めてゆく契機にもなるからです。

平成十一年以来、私達は宝覺寺における「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰靈祭」に参列させていただき、三万三千余柱の御霊の安らかならんことをお祈りしてまいりました。今後、この顕彰事業を風化させることなく、更に充実・拡大し、若い次世代に継承してゆくことが、「日本人として散華された御英霊」にお応えする私達の務めであると考えております。

以上の決意も新たに、わが國の近代史に類稀なる勇氣と献身を刻まれた御英霊の御遺徳を偲び、御霊の平安を心より祈念し、慰靈の言葉といたします。

日台の生命の絆 死守せむと

吾 日本の一角に起つ

平成二十一年

民國九十八年

皇紀二千六百六十九年

十一月二十五日

日華(台)親善友好慰靈訪問団

團長 小菅 亥三郎

結団の誓い

日台の生命の絆 死守せむと

吾 日本 の一角に起つ

この言葉は私たち団員のみならず、ご支援ご協力戴いております全ての同志の皆様のご共同の決意と信条であります。思いおこせば、九州不動産専門学院グループの社員研修旅行として初めて台湾を訪れたのは平成十一年の三月でした。爾来（じらい）、今年で十一年の歳月を刻むことになりましたが、現地の皆様の家族・兄弟の情愛にも勝るまごころ溢れるご歓待は、この旅に参加した私たち日本人をまたたく間に台湾の虜（とりこ）にしてしまふほど強烈なものでした。

台湾の皆様のごこのような姿勢は、訪問団結成以来、政権が国民党、民進党、そして今また国民党と変遷した今日に至る迄、いささかも変わることなく続いております。それは、領有五十年の時代に築かれた魂の絆と東洋平和の為に共に血と汗を流した運命的一体感に淵源を持つからであります。

私たちは欧米白色人種による鉄鎖の軛（くびき）から大東亜を解放するという時の政府の呼びかけに、血書嘆願し応召された台湾人元日本兵軍人軍属の皆様のご勲（いさおし）を忘れません。

そのため今年も台湾の皆様のご英霊を顕彰するために現地に赴きます。同時に一緒に戦われた私たちの誇るべき先達である日本人のご英霊に追悼と感謝の誠を捧げて参ります。

かくなる行為を通じて、現地台湾の皆様との家族・兄弟の契りを一層深めて参ります。それは、この道こそが、民主的平和国家として独立している台湾を支援するのみならず、日台両国の安全と国益に合致し、ひいては東アジア全体の平和と安定に寄与するものと確信するからです。

全ての心ある同志の皆様
今年も変わらぬご支援・ご協力の程よろしくお願いいたします。

平成二十一年十一月一日

陸海軍人二賜ハリタル勅諭

明治十五年一月四日

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐる中國のまつろはぬものともを討ち平け給ひし高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしより二千五百有餘年を経ぬ此間世の様の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制にて時ありて

は皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられしかは兵制は整ひたれとも打續ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れければ兵農おのつから二に分れ古の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士とも棟梁たる者に歸し世の亂と共

に政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武
家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯な
れるは人力もて挽回すへきにあらずとはいひ
なから且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に
背き奉り淺閒しき次第なり降りて弘化嘉永
の頃より徳川の幕府其政衰へ剩外國の事とも
起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りければ朕
か皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を惱
し給ひしこそ忝くも又惶けれ然るに朕幼くし

て天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返
上し大名小名其版籍を奉還し年を経すして海
内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の
忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖
宗の專蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへど
も併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重
きを知れるか故にこそあれされは此時に於て
兵制を更め我國の光を耀さんと思ひ此十五年
か程に陸海軍の制をは今の様に建定めぬ夫兵

馬の大權は朕か統ふる所なれば其司々をこそ
 臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て
 臣下に委ぬへきものにあらず子々孫々に至る
 まで篤く斯旨を傳へ天子は文武の大權を掌握
 するの義を存して再中世以降の如き失體なか
 らんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥な
 るそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を
 頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき朕か國
 家を保護して上天の恵に應し祖宗の恩に報い

まゐらする事を得るも得さるも汝等軍人か其
 職を盡すと盡さゝるとに由るそかし我國の稜
 威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共
 にせよ我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其
 譽を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と一心に
 なりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は
 永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の
 光華ともなりぬへし朕斯も深く汝等軍人に望
 むなれば猶訓諭すへき事こそあれいてや之を

左に述へむ

一軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我
國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なか
るへき況して軍人たらん者は此心の固から
ては物の用に立ち得へしとも思はれず軍人
にして報國の心堅固ならざるは如何程技藝
に熟し學術に長するも猶偶人にひとしかる
へし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節を存
せざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かる

へし抑國家を保護し國權を維持するは兵力
に在れば兵力の消長は是國運の盛衰なるこ
とを辨へ世論に惑はず政治に拘らす只一
途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも
重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ其操を
破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

一軍人は禮儀を正くすへし凡軍人には上元帥
より下一卒に至るまで其間に官職の階級あ
りて統屬するのみならず同列同級とても停

年ねんに新しん舊きうあれは新しん任にんの者ものは舊きう任にんのものに服ふく
從じうすへきものそ下か級きふのものは上じやう官くわんの命めいを承うけたまは
ること實じつは直たぢに朕ちんか命めいを承うけたまはる義ぎなりと心得こころえ
よ己おのれか隸れい屬ぞくする所ところにあらずとも上じやう級きふの者ものは
勿もちろ論ん停てい年ねんの己おのれより舊ふるきものに對たいしては總すへ
て敬けい禮れいを盡つくすへし又また上じやう級きふの者ものは下か級きふのもの
に向むかひ聊ちやうも輕けい侮ぶ驕けう傲がうの振ふる舞まひあるへからず公こう
務むの爲ために威ゐ嚴げんを主しゆとする時ときは格かく別べつなれども
其その外ほかは務つとめて懇ねんじやうに取とり扱あつかひ慈じ愛あいを專せん一いちと心こころ掛が
け上しやう下かう一いつ致ちして王わう事じに勤きん勞らうせよ若もし軍ぐん人じんたる

ものにして禮れい儀ぎを紊みだり上かみを敬うやまはす下しもを惠めぐま
すして一いつ致ちの和わ諧かいを失うしなひたらんには啻ただに軍ぐん
隊たいの蠱とど毒どくたるのみかは國こく家かの爲ためにもゆるし
難がたき罪ざい人にんなるへし

一ぐん軍じん人じんは武ぶ勇ゆうを尙たふとふへし夫それ武ぶ勇ゆうは我わが國こくににては
古いにしへよりいと貴たふとへる所ところなれば我わが國こくにの臣しん民みんた
らんもの武ぶ勇ゆうなくては叶かなふまし況まして軍ぐん人じん
は戰たつかひに臨のぞみ敵てきに當あたるの職しやくなれば片かた時ときも武ぶ勇ゆう

を忘れてよかるへきかさはあれ武勇には大
勇あり小勇ありて同からす血氣にはやり粗
暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し軍人
たらむものは常に能く義理を辨へ能く膽力
を練り思慮を殫して事を謀るへし小敵たり
とも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を
盡さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇を
尙ふものは常々人に接るには溫和を第一と
し諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を

好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひ
て豺狼などの如く思ひなむ心すへきことに
こそ

一軍人は信義を重んずへし凡信義を守ること
常の道にはあれとわきて軍人は信義なくて
は一日も隊伍の中に交りてあらんこと難か
るへし信とは己か言を踐行ひ義とは己か分
を盡すをいふなりされは信義を盡さむと思
は、始より其事の成し得へきか得へからさ

るかを審しりぞに思考しこうすへし臆おそ氣けなる事ことを假かり初そめに
諾うべなひてよしなき關係くわんけいを結むすひ後のちに至いたりて信義しんぎ
を立てんとすれば進退しんたい谷たりて身みの措おき所どころに
苦くるむことあり悔くゆとも其詮そのせんなし始はじめに能よく々く事こと
の順逆じゆんぎやくを辨わへ理非りひを考かんがへ其言そのことは所詮しよせん踐ふむへ
からすと知しり其義そのぎはとても守まもるへからすと
悟さとりなは速すみやかに止とどまるこそよけれ古いにしへより或あるは小
節せつの信義しんぎを立てんとて大綱たいかうの順逆じゆんぎやくを誤あやまり或ある
は公道こうだうの理非りひに踏迷ふみまよひて私情じやうの信義しんぎを守まもり

あたら英雄えいゆう豪傑ごうけつともか禍わざはひに遭あひ身みを滅ほろし屍かばね
の上うへの汚名をめいを後世のちのよまで遺のこせること其例そのためし尠すくなか
らぬものを深ふかく警いましめてやはあるへき

一軍人ぐんじんは質素しつそを旨むねとすへし凡質素およそしつそを旨むねとせさ
れは文弱ぶんじやくに流ながれ輕薄けいぱくに趨はしり驕奢けうしゃ華靡くわびの風ふうを
好このみ遂つひには貪汚たんをに陥おちりて志こころざしも無下むげに賤いやしくな
り節操せつさうも武勇ぶゆうも其甲斐そのかひなく世人よのひとに爪つまはしき
せらるゝ迄までに至いたりぬへし其身そのみ生涯しやうがいの不幸ふかな
りといふも中々なか愚おろかなり此風このふう一ひとたひ軍人ぐんじんの間あひだ

に起りては彼の傳染病の如く蔓延し士風も
兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之
を懼れて曩に免黜條例を施行し略此事を誠
め置きつれと猶も其惡習の出んことを憂ひ
て心安からねは故に又之を訓ふるそかし汝
等軍人ゆめ此訓誡を等閒にな思ひそ

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへか
らすさて之を行はんには一の誠心こそ大切な
れ抑此五ヶ條は我軍人の精神にして一の誠心

は又五ヶ條の精神なり心誠ならされは如何な
る嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用に
かは立つへき心たに誠あれは何事も成るもの
そかし況してや此五ヶ條は天地の公道人倫の
常經なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕か
訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を

盡さは日本國の蒼生舉りて之を悦ひなん朕一
人の懾のみならんや

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツル
コト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ
テ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育
ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修
メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣
メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺
風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ
遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ
悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコ
トヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

米英二對スル宣戰ノ詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ
昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕力陸海將兵ハ全力
ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕力百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ
朕力衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ舉
ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ
抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕
顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕力拳
々措カサル所而シテ列國トノ厚誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂
ヲ偕ニスルハ之亦帝國力常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今
ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得
サルモノアリ豈朕力志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ
眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝
國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸
ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提
攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃
ミテ兄弟尚未夕牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權
ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋

制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ
於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ
有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ
重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回
復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ
精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益
々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムト
ス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年
ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ
事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切
ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ
祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和
ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御 名 御 璽

昭和十六年十二月八日

大東亞戰爭終戰ノ詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕力志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歲ヲ閱シ朕力陸海將兵ノ勇戰朕力百僚有司ノ勵精朕力一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セズ世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我力民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕力帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ
遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職
域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内
爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚
生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ
受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善
ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪工忍
ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚
シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端
ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信
義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家
子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念
ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓
テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期
スヘシ爾臣民其レ克ク朕力意ヲ體セヨ

御 名 御 璽

昭和二十年八月十四日

戦陣訓

序

夫れ戦陣は、大命に基き、皇軍の神髓を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御稜威の尊嚴を感銘せしむる處なり。されば戦陣に臨む者は、深く皇國の使命を體し、堅く皇軍の道義を持し、皇國の威徳を四海に宣揚せんことを期せざるべからず。

惟ふに軍人精神の根本義は、畏くも軍人に賜はりたる勅諭に炳乎として明らかなり。而して戦闘竝に訓練等に關し準據すべき要綱は、又典令の綱領に教示せられたり。然るに戦陣の環境たる、兎もすれば

眼前の事象に捉はれて大本を逸し、時に其の行動軍人の本分に反るが如きことなしとせず。深く慎まざるべけんや。乃ち既往の經驗に鑑み、常に戦陣に於て勅諭を仰ぎて之が服行の完璧を期せむが爲、具體的行動の憑據を示し、以て皇軍道義の昂揚を圖らんとす。是戦陣訓の本旨とする所なり。

本訓 其の一

第一皇國

大日本は皇國なり。萬世一系の天皇上に在しまし、肇國の皇謨を紹繼して無窮に君臨し給ふ。皇恩萬民に遍く、聖徳八紘に光被す。臣民亦忠孝勇武祖孫相承け、皇國の道義を宣揚して天業を翼賛し奉り、君民一體以て克く國運の隆昌を致せり。

戰陣の將兵、宜しく我が國體の本義を體得し、牢固不拔の信念を堅持し、誓つて皇國守護の大任を完遂せんことを期すべし。

第一皇軍

軍は天皇統帥の下、神武の精神を體現し、以て皇國の威徳を顯揚し皇

運の扶翼に任ず。

常に大御心を奉じ、正にして武、武にして仁、克く世界の大和を現ずるものは是神武の精神なり。武は嚴なるべし仁は遍きを要す。苟も皇

軍に抗する敵あらば烈々たる武威を振ひ斷乎是を擊碎すべし。假令峻嚴の威克く敵を屈服せしむとも服するは撃たず従ふは慈しむ

の徳に缺くるあらば、未だ以て全しとは言ひ難し。武は驕らず仁は飾らず、自ら溢るるを以て尊しとなす。皇軍の本領は恩威並び行

はれ、遍く御綾威を仰がしむるに在り。

第三軍紀

皇軍軍紀の神髓は、畏くも大元帥陛下に對し奉る絶對隨順の崇高なる精神に存す。

上下齊しく統帥の尊嚴なる所以を感銘し、上は大權の承行を謹嚴にし、下は謹んで服従の至誠を致すべし。盡忠の赤誠相結び、脈絡一貫、全軍一令の下に寸毫紊るるなきは、是戰捷必須の要件にして、又實に治安確保の要道たり。

特に戰陣は、服従の精神實踐の極致を發揮すべき處とす。死生困苦の間に處し命令一下欣然として死地に投じ、黙々として獻身服行の實を擧ぐるもの、實に我が軍人精神の精華なり。

第四團 結

軍は、畏くも大元帥陛下を頭首と仰ぎ奉る。渥き聖慮を體し、忠誠の至精に和し、擧軍一心一體の實を致さざるべからず。軍隊は統率の本義に則り、隊長を核心とし、鞏固にして而も和氣藹々

たる團結を固成すべし。上下各々其の分を嚴守し、常に隊長の意圖に従ひ、誠心を他の腹中に置き、生死利害を超越して、全體の爲己を没するの覺悟なかるべからず。

第五 協 同

諸兵心を一にし、己の任務に邁進すると共に、全軍戰捷の爲欣然として没我協力の精神を發揮すべし。

各隊は互に其の任務を重んじ、名譽を尊び、相信じ相援け、自ら進んで苦難に就き、戮力協心相携へて目的達成の爲力闘せざるべからず。

第六 攻 撃 精 神

凡そ戰鬪は勇猛果敢、常に攻撃精神を以て一貫すべし。攻撃に方りては果斷積極機先を制し、剛毅不屈、敵を粉碎せずんば已

まざるべし。防禦又克く攻勢の銳氣を包藏し、必ず主動の地位を確保せよ。陣地は死すとも敵に委すること勿れ。追撃は斷々乎として飽く迄も徹底的なるべし。

勇往邁進百事懼れず、沈著大膽難局に處し、堅忍不拔困苦に克ち、有ゆる障碍を突破して一意勝利の獲得に邁進すべし。

第七 必勝の信念

信は力なり。自ら信じ毅然として戦ふ者常に克く勝者たり。必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず。須く寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず敵に勝つの實力を涵養すべし。

勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴史に鑑み、百戰百勝の傳統に對する己の責務を銘肝し、勝たずば斷じて已むべからず。

本訓 其の二

第一 敬神

神靈上に在りて照覽し給ふ。

心を正し身を修め篤く敬神の誠を捧げ、常に忠孝を心に念じ、仰いで神明の加護に恥ぢざるべし。

第二 孝道

忠孝一本は我が國道義の精粹にして、忠誠の士は又必ず純情の孝子なり。

戦陣深く父母の志を體して、克く盡忠の大義に徹し、以て祖先の遺風を顯彰せんことを期すべし。

第三 敬禮舉措

敬禮は至純なる服従心の發露にして、又上下一致の表現なり。戦陣の間特に嚴正なる敬禮を行はざるべからず。

禮節の精神内に充溢し、舉措謹嚴にして端正なるは強き武人たるの證左なり。

第四 戦友道

戦友の道義は、大義の下死生相結び、互に信賴の至情を致し、常に切磋琢磨し、緩急相救ひ、非違相戒めて、俱に軍人の本分を完うするに在り。

第五 率先躬行

幹部は熱誠以て百行の範たるべし。上正しからざれば下必ず紊る。戦陣は實行を尚ぶ。躬を以て衆に先んじ毅然として行ふべし。

第六 責任

任務は神聖なり。責任は極めて重し。一業一務忽せにせず、心魂を傾注して一切の手段を盡くし、之が達成に遺憾なきを期すべし。

責任を重んずる者、是眞に戰場に於ける最大の勇者なり。

第七 死生觀

死生を貫くものは崇高なる獻身奉公の精神なり。

生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を盡くし、從容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし。

第八 名を惜しむ

恥を知る者は強し。常に郷黨家門の面目を思ひ、愈々奮勵して其の

期待きたいに答こたふべし。

生きてい虜囚りようの辱はづかしめを受けうけず、死しして罪禍ざいくわの汚名をめいを残のこすこと勿なかれ。

第九 質實剛健

質實しつじつ以て陣中ちんちゆうの起居ききよを律りつし、剛健がうけんなる士風しふうを作興さくこうし、旺盛わうせいなる志氣しきを振起しんきすべし。

陣中ちんちゆうの生活せいくわつは簡素かんそならざるべからず。不自由ふじいうは常つねなるを思おもひ、毎事まいじ節約せつやくに努つとむべし。奢侈しゃしは勇猛ゆうまうの精神せいしんを蝕むしばむものなり。

第十 清廉潔白

清廉せいれん潔白けつぱくは、武人ぶじん氣節きせつの由よつて立たつ所ところなり。己おのれに克かつこと能あたはずして物欲ぶつよくに捉とらはるる者もの、争いでか皇國くわうこくに身命しんめいを捧ささぐるを得えん。

身みを持ちするに冷嚴れいげんなれ。事ことに處しよするに公正こうせいなれ。行おこなひて俯仰ふぎやう天地てんちに愧はぢざるべし。

本訓 其の三

第一 戦陣の戒

一 瞬間の油断、不測の大事を生ず。常に備へ嚴に警めざるべからず。

敵及住民を輕侮するを止めよ。小成に安んじて勞を厭ふこと勿れ。不注意も亦災禍の因と知るべし。

二 軍機を守るに細心なれ。謀者は常に身邊に在り。

三 哨務は重大なり。一軍の安危を擔ひ、一隊の軍紀を代表す。宜

しく身を以て其の重きに任じ、嚴肅に之を服行すべし。

哨兵の身分は又深く之を尊重せざるべからず。

四 思想戦は、現代戦の重要なる一面なり。皇國に對する不動の信念を以て、敵の宣傳欺瞞を破摧するのみならず、進んで皇道の宣布に勉むべし。

五 流言蜚語は信念の弱きに生ず。惑ふこと勿れ動すること勿れ。皇軍の實力を確信し、篤く上官を信賴すべし。

六 敵産、敵資の保護に留意するを要す。

徴發、押収、物資の燼滅等は總て規定に従ひ、必ず指揮官の命に依るべし。

七 皇軍の本義に鑑み、仁恕の心能く無辜の住民を愛護すべし。

八 戦陣苟も酒色に心奪はれ、又は慾情に驅られて本心を失ひ、皇軍の威信を損じ、奉公の身を過るが如きことあるべからず。深く

戒愼し、斷じて武人の清節を汚さざらんことを期すべし。

九 怒を抑え不満を制すべし。「怒は敵と思へ」と古人も教えたり。

一瞬の激情侮を後日に残すこと多し。

軍法の峻嚴なるは特に軍人の榮譽を保持し、皇軍の威信を完うせんが爲なり。常に出征當時の決意と感激とを想起し、遙かに思を父母妻子の眞情に馳せ、假初にも身を罪科に曝すこと勿れ。

第二 戦陣の嗜

一 尚武の傳統に培ひ、武徳の涵養、技能の練磨に勉むべし。

「毎事退屈する勿れ」とは古き武將の言葉にも見えたり。

二 後顧の憂を絶ちて只管奉公の道に勵み、常に身邊を整へて死後を清くするの嗜を肝要とす。

屍を戦野に曝すは固より軍人の覺悟なり。縦ひ遺骨の還らざる

ことあるも、敢て意とせざる様豫て家人に含め置くべし。

三 戦陣病魔に斃るるは遺憾の極なり。特に衛生を重んじ、己の不

節制に因り奉公に支障を來すが如きことあるべからず。

四 刀を魂とし馬を寶と爲せる古武士の嗜を心とし、戦陣の間

常に兵器資材を尊重し、馬匹を愛護せよ。

五 陣中の徳義は戦力の因なり。常に他隊の便益を思ひ、宿舎、物資

の獨占の如きは慎むべし。

「立つ鳥跡を濁さず」と言へり。雄々しく床しき皇軍の名を、異郷邊土にも永く傳へられたきものなり。

六 總じて武勲を誇らず、功を人に譲るは武人の高風とする所なり。

他の榮達を嫉まず己の認められざるを恨まず、省みて我が誠の足らざるを思ふべし。

七 諸事正直を旨とし、誇張虚言を恥とせよ。

八 常に大國民たるの襟度を持し、正を踐み義を貫きて皇國の威風を世界に宣揚すべし。

國際の儀禮亦輕んずべからず。

九 萬死に一生を得て歸還の大命に浴することあらば、具に思を護國の英靈に致し、言行を慎みて國民の範となり、愈々奉公の覺悟を固くすべし。

結 むすび

以上述ぶる所は、悉く勅諭に發し、又之に歸するものなり。されば之を戰陣道義の實踐に資し、以て聖諭服行の完璧を期せざるべからず。

戰陣の將兵、須く此の趣旨を體し、愈々奉公の至誠を擢んで、克く軍人の本文を完うして、皇恩の渥きに答へ奉るべし。